家庭雜誌

第參拾八號

國民新聞

看よ!!!國民新聞の新面目!!!
看よ!!!國民新聞獨得の特色!!!

如何に國民新聞が、機敏、活潑、熱心、眞實、以て淸國征伐に全力を盡し、以て新聞紙の責任と面目とに盡瘁し、發揮しつゝあるかは、江湖の見る所、國民新聞紙面の自證する所、必ずしも呶々を費さず。國民新聞が率先して建議したる**天皇親征**の實此に擧りて**大元帥陛下**聖駕を廣島に移つし玉ふや、本社は實に左の三氏を特派せり。左の三社員は軍事の中心たり兼て政務の中心たり、**軍國の機密**大小となく**發動示顯**する**日本第一の要地たる大本營**の地に在り其電報、通信の獨り**斬新**なるのみならず、**精確**にして**信**を**措**くべきは、他の企て及ばざる所且つ從て一種の**特色**あるは必ずしも多言を要せず

在廣島大本營　德富猪一郎、深井英五、横澤三次郎

日淸戰地戰場の**特別通信**に至りて**比類**なき程多くの通信員を派し、**大島少將**の**軍**に**久保田米僊　菊池謙讓**の兩氏あり、**野津第五師團長**の**軍**に**阿部充家**氏あり

松原岩五郎氏は深く既に朝鮮の內地に在りて探撿し**今**や**大邱府**にあり

平田久氏は**船舶往來**の**要所馬關**に在り其他

釜山にて**鑑湖生**　**京城**にて**天涯生**　**仁川**にて**愛民生**

の諸氏が國民新聞に向て如何なる報導を爲すか讀者須らく**刮目**せよ

定價一ヶ月卅五錢、三ヶ月壹圓、東京市外郵稅一ヶ月ニ付拾三錢ツ、●廣告料一行一回金拾三錢二回以上金拾二錢

發行所　東京市京橋區日吉町　**國民新聞社**

● 牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

● 此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調合シアルモノナリ

● 筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓ハ肺病、貧血、病後衰弱、小兒ノ衰弱症及氣力衰ヘタルモノニ最好最良ノ調合物ニテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

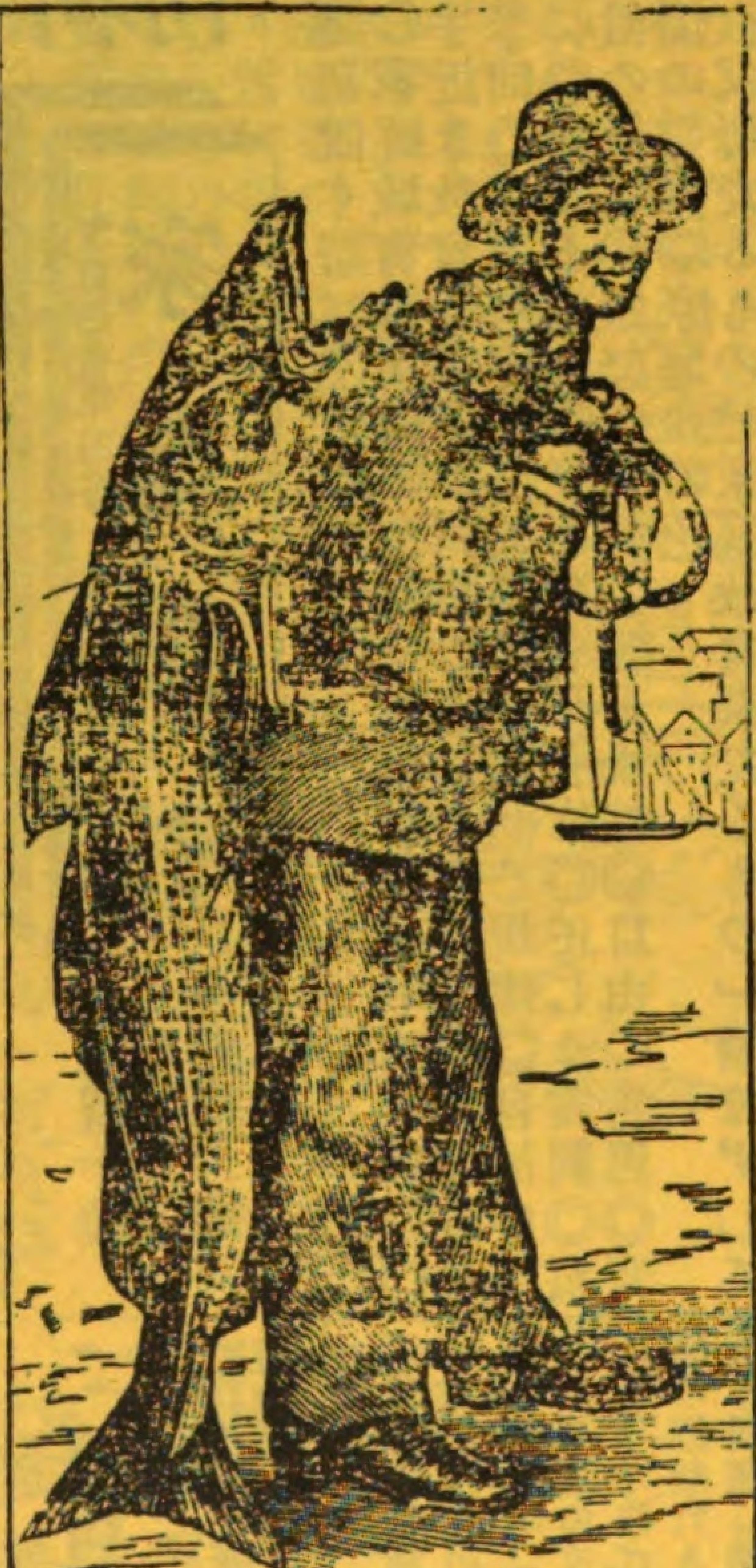
● 龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

米國貿易商會

横濱廿八番
神戸十七番

● 賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配合ナル

スコット乳菓

平民叢書完結廣告

平民叢書第十卷 白晳人種の前途

定價拾二錢
郵税　二錢

目錄⦿緒論⦿第一人種◎(一)世界は白晳人種の專有たる可き乎◎(二)濠洲の勞働問題◎(三)亞非利加に於ける白晳人種◎(四)支那人及印度人◎(五)亞米利加に於ける白晳人種◎(六)世界は白晳人種の專有たる可き乎⦿第二、社會◎(一)膨脹の停止と社會の變革○一、未開人種の壓迫と文明の壽命○二、過剩人口の處分と國家社會主義○三、將來の社會的狀態◎(二)文明社會の危險○一、軍備及戰爭○二、大都府の生長○三、公債の增加◎(三)國民的精神○一、國民的精神の必要○二、國家と教會○三、國民的精神の發達⦿第三、家族◎(一)家族專制◎(二)個人主義、家族主義及び國家主義⦿第四、品性◎(一)國家社會主義の影響◎(二)將來の宗教◎(三)將來の科學◎(四)將來の文藝◎(六)社會の老齡

本書に對し各新聞批評

◉原書は國民的生活及品性と題する書にしてチャールビーアナン氏の著に係る其說く所白晳人種が日一日衰亡に近く所以を論證するに在り引例該博筆鋒縱橫眞に光焰萬丈の態あり抑西人の文明に誇る久し而して實は老齡逼迫するを知らず本書の如きは實に攪眼の曉鐘と云ふべき也其議論の順序を摘記すれば第一人種の題下に世界は白晳人種の專有たるべき乎の疑問を起し第二社會の題下に膨脹の停止と社會の變革文明社會の危險國民的精神を論じ第三家族の題下に家族專制個人主義家族主義國家主義を說き第四品性の題下に國家社會主義の影響と將來の宗教科學文藝より說入て白晳人種の社會は老衰退弱の象を呈せることを斷證せり(日々)

◉民友社の平民叢書は此れを以て最良とす蓋し十卷の書大抵有用にして近代思想の傳播に力ありしは疑ふ可らずして就中此書の如きは極めて有用必讀の書と云はざる可らず蓋し邦人の人種的競爭に注目せざるや甚だしく談此等の事に及べば耳を蔽ふて走らんと欲す此書の說く所は頗る高遠なるも文辭流暢にして解し易く讀者をして諸問題中にも大なる人種的問題を解せしめ併せて他の一面に於て日本人が前途の多望なるを自覺せしむ余輩は片々たる小說稗史を讀むを已めかゝる有用なる書籍を讀まんことを世人に勸告す著者は民友社中の一才筆家深井英吾氏定價僅々十錢(金城新報)

◎第一卷　十九世紀之大勢　定價十二錢　郵税二錢
◎第二卷　世界經濟上之變動　定價十二錢　郵税二錢
◎第三卷　國家と政府　定價十二錢　郵税二錢
◎第四卷　教育と遺傳　定價十二錢　郵税二錢
◎第五卷　文明之弊及其救治　定價十二錢　郵税二錢
◎第六卷　現時之社會主義　定價十二錢　郵税二錢
◎第七卷　經濟と道德　定價十二錢　郵税二錢
◎第八卷　歷史攻究法　定價十二錢　郵税二錢
◎第九卷　哲學變遷史　定價十二錢　郵税二錢
◎外號　銀貨之過去現在未來　定價十二錢　郵税二錢
◎外號　責任內閣　定價十二錢　郵税二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

高木信威纂譯

ピツト

肖像入
定價二十錢
郵税四錢

各新聞の批評

●ピツト氏は二十二歲にして代議士となり二十三歲財務大臣となり廿四歲にして總理大臣となりし英國著名の政治家なるとは世人の既に知る處本書は現時英國の總理大臣にして優秀の名高きローズベリー伯の原著に基き流暢の筆華麗の文を以て譯したるもの篇を分ちてピツト何人ぞ、其少時、シユルボルン及聯立内閣少年宰相、ピツト内閣の初年、ウォーレンヘスチングズと攝政職、外政、佛國革命の影、戰爭大臣たるピツト、内治、愛爾蘭、政府顚覆、最後ピツトの人物及地位、の十四段となし此俊傑の性行事迹を明快に詳説す之を著者の前著たるゲーテに比すれば敍事の細密結構の雄壯同日の論に非ず葢し詩人と政事家と其天分事業を異にするに由るとは雖も抑も亦著者が奮勵一番せしに非ざれば焉ぞ能く此の如くなるを得ん曩に民友社出版の人物傳中に在ては德富健二郎氏のグラツドストンと相幷て相下らざる好書なるべし聞が如くんば著者は齡纔かに二十二と而て著はす所皆秀逸勉めて已まずんば造詣測り知るべからざるものあらむ(京橋區日吉町民友社發行定價二十錢)(日々)

●高木信威氏の纂譯にて英國政治家ピツトの一代を敘したるもの文章は例の德富流ゆゑ雄渾として誦すべく敘事評論最も精逸、啻だピツトの心胸而目を知るに足るのみならず側面より英國四十年間の奇變多かりし歴史を察すべし(中央)

●サツカレーの所謂曠前絶後の萬能男子ウヰリヤム、ピツトの生涯を知らんと欲せば先づ本書を讀んで可なり是れ現英國の主相ローズベリー氏自ら其腦漿の幾分を割ちたるピツト論を基本として編みたるもの未だ必ずしも間然する所なしとは言はず何となれば曩きに土岐某氏の譯述にかゝる經國龜鑑といふものあればなり(二六)

●二十四歲の總理大臣ピツトは、議院政治家の摸範也、典型也、今の所謂政治家を以て任ずる者、幸ひに讀んで鑑みる所あれ

●代議制の世界に創立せられて以來未曾有の長命内閣はピツトの内閣なり而も其長命を持續したるは無理遣りの手段に出でたるにあらざるは大に範とすべきなり伊藤内閣の治下に立つ國民は參考の爲め一讀すべし(讀賣)

●ピツトの詳傳なり、翻譯なりと雖も譯者の獨見に出づる議論も多し、是れ亦銷夏の好侶伴と云ふべし(經濟雜誌)

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

毎月二回三ノ日發行

國民之友

多閑人は勿論讀むべし、多忙人最も讀ざる可らず。

國民之友 最も多くの人によりて、最も多くの精力を凝結す。

◎定價一册六錢二十册壹圓壹錢郵税一册五厘◎廣告料一行拾五錢

對外自主、責任內閣は夙に彼れが唱導して以て一代の風雲を皷動飛揚せしめたる所。支那征伐、朝鮮獨立は彼が今日最も熱心贊襄する所看よ彼は世界的雜誌なり雜誌界の巨人なり一國の生活と思想とを知らんと欲するものは彼に來れ。

彼の描く所は演習に非ず實戰にあり、彼は大勢の實體を描き、大勢の活動を描き、大勢の機先を描き而して大勢彼自身を描く、彼は議論せんが爲めに議論せず實行せんが爲に議論する也、經世實用は彼の本領也。

三分の一は歷史家たり、三分の一は經世家たり、三分の一は豫言者たり。

新議論新人物を紹介するは彼が最も熱留する所、新人物によりて新議論を紹介するは彼が特に欣喜する所、批評界寂寥たるの今日、或は沈着に痛快に眞實に精嚴に大量なる批評界の陳呉たるを期す。

彼れ世界的知識あり故に國民的經綸あり、彼れ超越黨派的なり故に能く黨派の正邪を辨識し正黨を善用して一世を革新する也。

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

日清韓三國實用地圖

（九月五日國民新聞附錄）

編修を勉めず、實用を旨とす、用意周到、電信線あり、鐵道線あり、海陸里程表あり。世上滔々たる中に於て超群絶倫と爲す。右は購讀者諸君の便宜を料りて、特別廉價にて發賣す。

一枚壹錢五厘 郵税一枚以上七枚まで一錢。以上七枚を増す毎に二錢を追加す。されば可成多數申合せ注文相成り候方便利なる可し。尤も注文は一切前金を要す

發賣所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

四版 **第一國民小說** 定價拾五錢 郵税四錢

五版 **第二國民小說** 定價拾五錢 郵税六錢

三版 **第三國民小說** 定價拾五錢 郵税四錢

第四國民小說 定價拾五錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

○れーす傳習廣告○

右廿名限り傳習す 至急御賴談あれ

麻布區谷町五拾六番地 柴田

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

		郵税
一冊	金五錢	地方 金五錢五厘
半年（十二冊）前金五十錢		金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓		共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 有馬俊彦

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年九月廿五日發行

家庭雜誌第參拾八號

目錄



家庭雑誌第参拾八號
（明治二十七年九月廿五日發兌）

社説

美想を養成すべき事

敢て自ら詩人たれとは言はず、敢て自ら樂人たれとは言はず、又敢て自ら美術家たれとは言はず。唯美を味ふの力に至ては、吾人は何人も之を養はんことを切望するに堪へざるなり。

美妙の感想が間接に道念を擁護し、以て人の行を正しきに保たしむること、一々之を擧ぐるも煩はしければ言はざれども、中に就て人の氣品を高むるに力あるは、特に著しとする所たり。

遠く東の征戰に趨りたる八幡公は、鎧の袖に散りかゝる勿來關外の花を拂ふて、

吹く風をなこその關と思へども
みちもせに散る山櫻かな。

と叫ぶことに由て、如何に其人品を千古に高からしめしよ。南朝の小楠公は、勅媒の婚を辭して

とても世にながらふべくもあらぬ身の
かりの契りをいかで結ばん。

と言ふことに由て、如何に其の人品を千古に高からしめしよ。抑又突撃雷の如くに猛烈なる北越の大守は、月下に槊を横へて

霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。
越山併得能州景。遮莫家鄕思遠征。

と賦することに由て、如何に其人品を千古に高からしめしよ。

武人にまれ、政治家にまれ、經濟家にまれ、宗教家若くは教育家にまれ、農にまれ、商にまれ、工にまれ、別

に美術的技能を須要とするものにあらざるも、美想に富むが爲に、其人品を高むると、洵に此の如きものあり。況してや人を慰撫し調和し奬勵し鼓舞し愛育敎養するを其天職とし、淸美を其質とする婦人に至ては、美育の必要あることと今更めて言ふまでもなきなり。勿論婦人の多數は天成の美術家なり、音樂詩歌繪畫等の嗜好の其性に出るもの固に少なからず。從て其音樂により詩歌により繪畫等によりて、若くは其音樂的詩歌的繪畫的等の美想によりて、自家の價値を保ち、家庭の和樂と淸麗とを扶け、以て其家風の品位を維持しつゝあるもの實際珍らしゝとするに足らざる所。獨り

　淺香山かげさへ見ゆる山の井の
　　あさくも人を思ふものかは。

と歌ひたる釆女の詠が、能く諸兄王の怒を解きたりしのみにあらず。琴を撫して

　風吹けばおきつ白浪たつた山
　　夜半にや君がひとりこゆらん。

と諷誦したる一婦人が、能く其夫婿を動かしたりしのみならず。七條后の崩御に逢ひて

　おきつなみあれのみまさる宮のうちは、年へて住みし伊勢のあまも、舟流したる心地して、よらん方なく悲しきに、涙の色の紅は我等が中の時雨にて、秋の紅葉と人々は　おのがちりぢり別れなば、たのも影なく成りはてゝ、とまるものとは花薄　君なき庭にむれ立ちて、空をまねかば初雁の　鳴き渡りつゝよそにこそ見め。

と詠じたる伊勢の歌が、能く聞くものをして悉く涙を掩はしめ、或は爲めに感激して偕となるに至らしめたりしのみにあらず。將た

　我子なら供にはやらじ夜の雪。

と言へる西島某の妻の短句が、能く其夫をして一小奴を雪夜に伴ふを止めしめたりしのみにもあらず。

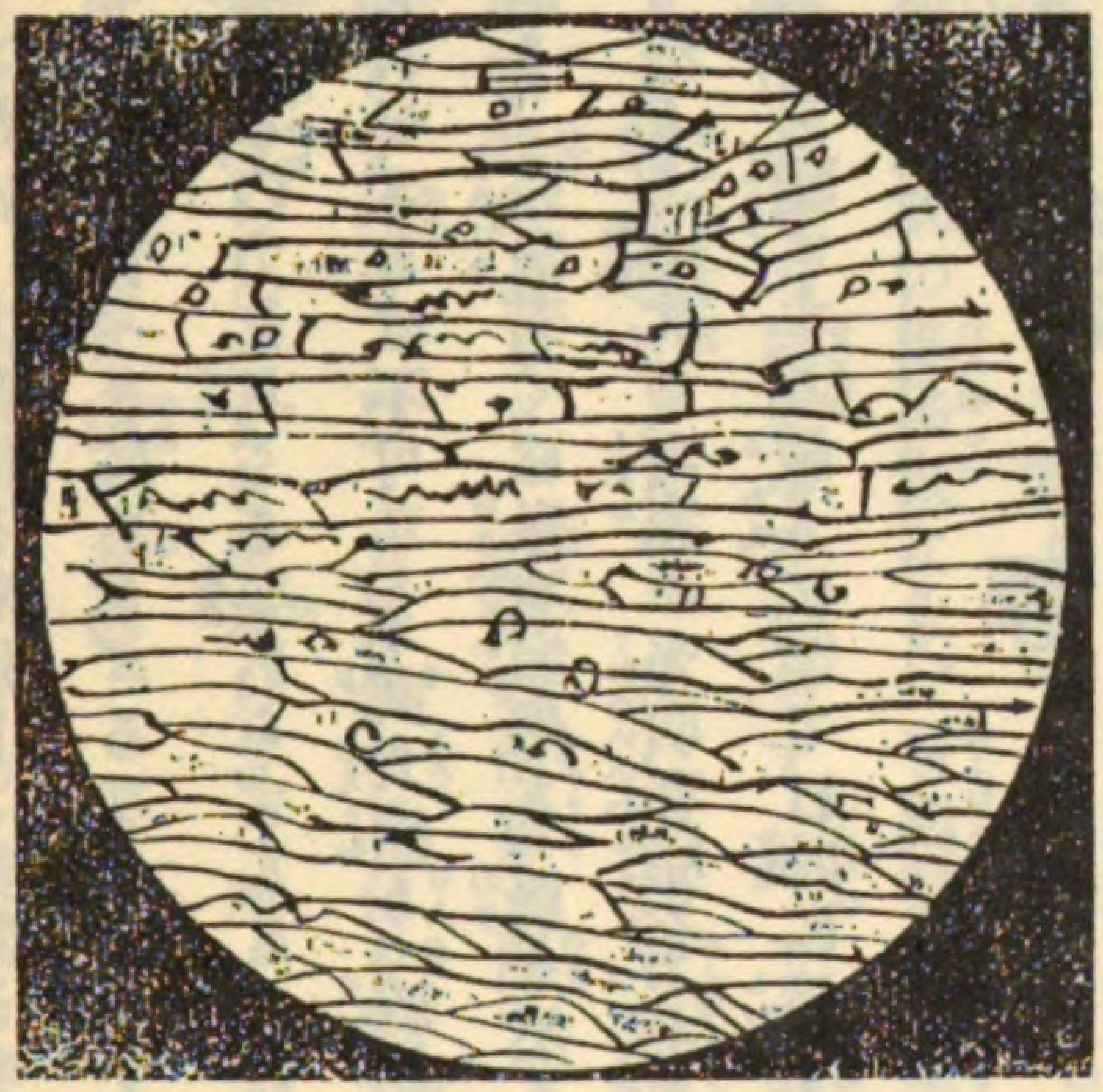
故に此等の遊藝（或る意味より云へば）に耽りて其業を怠り、若くは爲に實用の講學を廢する如きは、其不可固より言ふまでもなきことなれども、人誰れも多少の餘閑なきにあらざれば、其餘間を利用して美想を養ふこと、亦決して忽せにすべきにあらざるなり。必ずしも自ら述作鼓奏するの力を具ふる要あらずとも、之を翫味するの力を有せざるは不可なり。武人然り、政治家然り、經濟家然り、宗敎若くは敎育家然り、農も然り、商も然り、工も然り。中にも身家の光明和樂を主り、子女の氣品を養ふを職とする婦人に至ては特に然り。

科學

塵埃の奇談（二）

人の目が顯微鏡の代用を勤め得へくば、最初に出合ふ怪物は、塵ならん。そは現に我等の口より躰中に入り込みつゝある塵は、知らざる中こそ何にてもなけれども、一度之を見る時は、長き棒きれ、丸るき鎖ぎれ、細〴〵しき虫の集まりて、一呼吸毎に幾個となく肺に入りつゝあるを見るべければ也。第一圖二圖を不意に眺むる人は、美人の着たる小袖の小紋にも似て、美くしく、之れが塵ならんとは殆ど心付かざるべし。之れは熱躰地方の植物が、風のために携へられて千二百里も旅行して其間に細末となりしものなり。かゝる遠方より如何にして此の塵は來り得るやと掛念し給ふ人もあらん。されど極めて小さき細胞より成れる植物が、こな〳〵になりて飛び來るとは、奇態のとはあらざるべし。その細胞の小なることは、四百十億〇〇〇〇〇〇〇〇個を合したりとも、僅かに一吋四角となりて、重さ二百二十ゲレインとなるに過ぎざるものさへあれば也。（一ゲレインは我二厘七毛餘に當る）塵に付きては語るべきと尙ほ〳〵あり。我等が蠟燭の火にて見るを得らるゝ塵も、

太陽の光に照らさば、明に見るを得べく、太陽の光線にては、一點の塵もなしと思へる室に、電光をはなたば、更らに夥多の塵を發見すべし。天地間の物は、大低皆な塵埃製造者なり。花も亦たその一なり。木の子、苔もその一なり。蕨の類もその一なり。俗に鬼蕨と呼ぶものあり、葉の裏に一分位の大なる黄色なる瘤の如きものありて、熟するに隨つて細粉を散布す。もし顯微鏡を以て之れを照す時は、一つの瘤の中には、五十個づゝの箱の如きものあり。その箱の中には、各々千個の細粉ありて、風に隨がひて、霧の如く、烟の如くなりて、空中に散布す。又た菌の細粉あり、最も大なるものと雖も、顯微鏡にあらざれば見ることを得ざるが、常に空中をさまよひて、適當なる住居を求めつゝあり。菌のある近傍に、置くに糊を以てすれば、一夜にして糊の中に黴の成長せるものを見出すべし。其外にも、バクテリヤと稱する有機物の塵あり。酒等の醱酵し、或は黑死病、コレラ、マラリヤ等の諸病を作



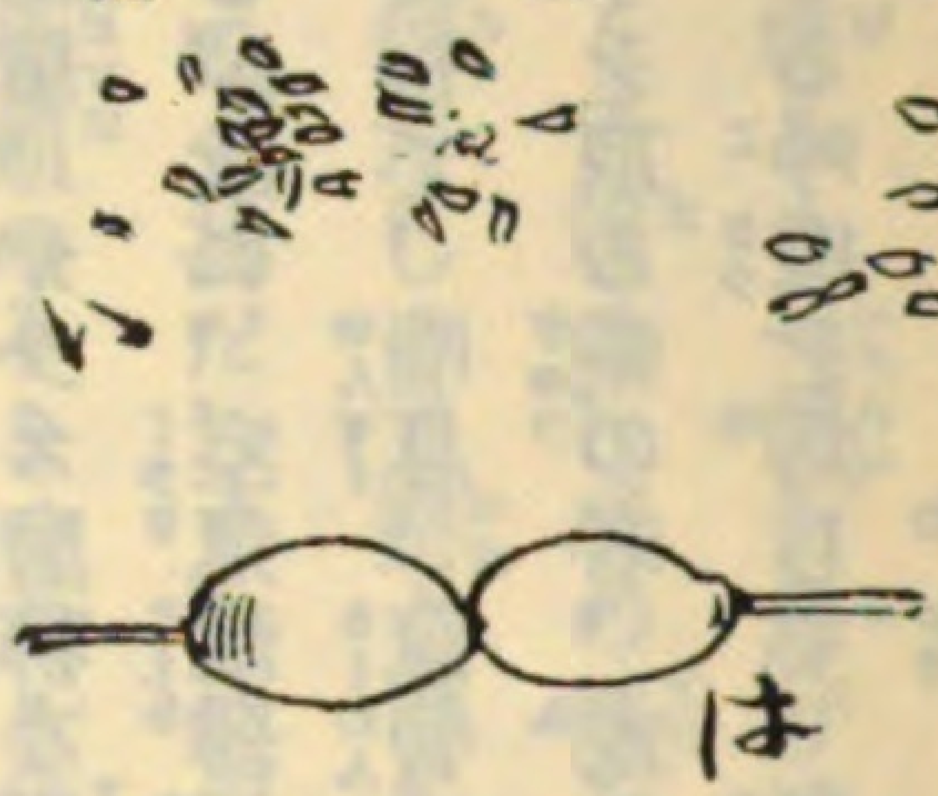
第一圖



第二圖

るは、皆なバクテリヤの一種なるが、こは多く不潔にして、濕氣ある地に成長す、もし其形を見んと欲せば、第三圖に示めせるものは即ちそれなり。

第三圖



前號の紙上には塵なくば霧もなく、雲もなしと云ひしが、そを手輕に試驗するの法あり。即ち罎の口を鐵瓶の沸騰せる口にさしをく時は、通常の考へより云へば蒸發氣は霧となりて中に滿つべき筈なるに、さわあらで、瓶の肌より汗となりて落ち來るを見るべし。これ最も純粹なる蒸氣は、霧又は雲を作らざるの證據にして、空中の霧が人目に觸るゝは、一粒づゝの霧の中に、各々多少の塵の混ぜしを知るべし。尚ほその一證となすべきものあり。天空高かき上にて氷結せし霰を取りて顯微鏡にて見る時は、中に幾多の塵を發見すべし、之れ蒸發氣が空中にて、塵と合せし證據也。

先きに塵なき所には光なしと云へり。素人の考へには、空中に一點の塵なきに至たらば、世界は今日に增して明かなるべしと思ふ也。然れども道理は之れと全く相反せり。凡て光りは世界に充滿する小さき塵埃を傳はつて來たるが故に、光なくば塵見へず、塵なくば光見へざるなり。その證據として知られたるは、星と星とのかゝれる遙かの天空なり。そこは里數より云へば、太陽には近かづきし割合なれども、案外にも眞暗にして。だん〳〵地球に近かづくに隨がひて、光は層一層明るくなれるは、地球の周圍にある塵のために光を導き來たす證據也。一方に益あるものは一方に害あり。塵は光線を導くの大功あれども、人の肺に入りては、甚だしき害を爲す。故に肺は之れを防せがんとして、人の躰には常に空氣漉器械を備へ付けあり。器械

の仕掛けは、喉より肺に至たる道中に、細き毛の林ありて、常に上の方にて波の如く動けり。口より入り來れる空氣が、肺に入るには、是非ともその林を通らざるべからず。その通行の際には、關税として、必ず塵計りは取り上げ、純粹の空氣のみは、通行をゆるす也。金ボタンの製造人、石炭礦の採堀人、石屋煉瓦屋、綿屋、ガラス磨粉な引き等は、常に非常の塵を呼吸するが故に、空氣濾器械、其用に勞かれ多くは、脈衝を發して、喘息、氣管支炎等の病を起こす也。植物の種子を取る業の者、或る時ヒーヒーと云ふ、苦るしそうなる呼吸を爲して、醫師の所に至り、私は毎年種子取りにせわしき時候に至り候時は、必らず喉にいたみを感じ、喘を發して、誠に困難いたし候と云ひしに、醫師は診察の上、その職業を問ひ、こは餘り多くの塵が咽喉に入るが故なりとて、麻切にて兩面を蓋ひ、中に綿を入れたるものを作りて、之を與たへ働く時は、常に口に當てゝ呼吸を爲さしめしに、全く其年より、定期病は去るに至たりしと云ふ。石炭採の肺の黒きと、石屋の肺の中に石のかげの積れるも、誰れも解剖によりて知る所なり。彼等も綿の空氣こしを用ゆれば、大に益する處あらん。

海水も空氣と同なじく多分の塵を含くめるがその塵の分子の大小多少によりて、水の色に種々の區別を生ぜり。而して塵の無き處は空氣と全じく光線射通せずして暗黒なり。太西洋の中央は殆ど塵なきが故に、僅かに洋藍色を含める外は、殆ど暗黒なり。之れにて塵が如何に不用らしく見へて、其實大用あるかを知るに足らん。

塵の製造人

自然界に於ける塵埃製造人の一は、熱と寒なり。中にも寒が塵を造るの法方は實に奇態なるものあり。高さ數丈、廣さ、厚さ、共に數十丈に亘たれる大岩巨石は、

地震を除きては、天地の間に之れを破壊するものなし。石屋が數百人かゝりて幾十日を費やすも、之が三つ一をも欠ぎ取るとは能わざるべし。まして之を粉な〳〵に爲すをや。然るに寒さは此巨岩を一割になし、粉な〳〵になすの力ありとは、驚くべき談ならずや。手輕るき一例を擧げて之を證せんに、人々が最も堅固なりと頼のむ所の鐵を以て、厚つき瓶を作り、中に水を滿たしめて堅く口を閉ざし、之を零度以下の所に置きて、甚だしく中の水を氷らしむるに、驚くべきは、今迄頼のみきつたる鐵の瓶は、もろきこと銷よりも甚だしく、バらりと兩つに破るべし。もし幸にして瓶は破れずとするも、三磅の重みある栓の、しかも力を盡くしておし込みしものは、大砲の如き大聲と共に、三百二十八呎の處迄飛び出だすべし、寒さは之れと仝なじ割合の力を以て大岩巨石を碎くなり。如何にして之を碎くかと云ふに岩にも、石にも、大小幾多の穴あるが故に、雨露の入るの分量は海綿に水の含くめる如く、隨分多量なるを知らん。然るに水は凡て氷結すれば、非常にその量を增すが故に、各々の穴の中にてふくれたる氷の、行くべき所なきが故に、遂に大岩をも碎くに至るなり。ロンドンと、エヂンバラとの間にある、四百マイルの鐵道は、冬に至れば三百三十八ヤードづゝ長くなるが故に、もし鐵道の何れかに少しづゝの隙を作りをかざれば、或は高くふくれ上り、或は蛇の蟠かまりたる如き形となりて、滊車通行の危險云ふべからず。寒の力はそれ程大なり。然しもし自然が此の巨石を粹きて塵となさゞれば、常に冷へつゝある地球は、岩の上に岩を生じ、地上凡べて岩と化するに至るべし。然らざるは寒の功用也。又た熱の物を腐敗せしめ、若しくは乾燥せしめて、塵の多分を作るとは、更らに說くの必要あらざるべし。腐されたるものを燒き盡くして之を、地上よりはらはざれば、此の地球は

如何に病氣と、不愉快と、不清潔の、地獄となるべきぞ。もし濕氣ある木の葉の一積を、乾燥せしめて黴塵となし、或は菌の生じて白くなりたる衣服を、一日の日光を以て後なからしむるとなき時は、人の一生は五十年の一割も生き長らへ得ざるべし。（以下次號）

史談

修羅場裡の天使（下）

（ナイチンゲール女史の事蹟）

光明天使の一隊は、黒雲暗憺たる修羅場に入れり。十一月十四日、ナイチンゲール女史以下四十二名の篤志婦人は、君士丹丁堡に着しぬ。

當時英軍の病院は、君士丹丁堡とマルモラ一葦の帶水を隔てたるスクタリーにありき。ナイチンゲール女史が、四十二名の婦人を従へて此處に着するや。恰も女史の決心と手練を試めさん爲なるかの如く、インケルマンの大戰其明日を以て戰はれ、輕傷重傷の手負は雲の如く送り來られたり。病院已に二千三百名の手負患者を入れありたれば、此一戰の手負の數を合せては、入院者の數は實に人をして愕然措置を失せしむ可きものありき。然るにナイチンゲール女史及其一行は、素より覺悟の前の事とて、聊かも騷ぎ驚く氣色なし、靜かに其光明的事業に取りかゝりぬ。

冬は來れり、寒氣指を墮す冬は來れり。戰は益〻劇しく、手負の數はます〳〵加はり來れり。到着後多くの月を經ずして、ナイチンゲール女史の保管の下に來りし患者の數は實に一萬の夥しきにあまり、スクタリーの戰地病院のみにても、其間二呎六吋を隔てゝ列べし病床の長さは、二哩三分の一の長さに亘れり。此莫大の患者を引受けし女史の勞果して如何。女史は實に其身躰の虛弱なるにも關せず、麾下の看護婦を指揮し、

院内を巡視し、衣糧醫藥を世話して、一連に二十時間も立つゞけたることあり。天使の如く柔和なる仁德の光と黒鐵の如く堅硬なる意思の力を以て、沍寒の冬と戰ひ、運搬の不便と戰ひ、大混亂大錯雜と戰ひ、斯くて呻吟怒罵呪咀汚穢饑餓惡疫を以て滿ちたる戰地病院は、月を出でずして清潔にして秩序整たる天晴文明國の假病院に愧ざる者となりぬ。女史の纎少なる躰軀は一連二十四時間の勞働に堪て餘裕ありき、女史の限なき博愛の慈母心は一萬の鬚髯めしく音吐鐘の吼ふるが如き武夫を庇ひて綽々として餘裕ありき。手負病者の看護は云ふも更なり、萬の惡疫傳染疾の原因を搜りて之を除く、皆女史の務むる所なりき。世には献身的精神の力程强きものはあらず、光明程有力なるものはあらず。ナイチンゲール女史實に纎弱なる一婦人に過ぎざりしと雖とも、幾千百の荒くれ男は小兒の如く其言を聞けり。彼等は女史が彼等の爲めに盡さんとて、富家の安逸を棄て、故郷の快樂を棄て、渾てのものを打棄てゝ、寒氣砲煙鮮血饑餓疫病の醞釀する此戰地に來れるを知れり。其献身的精神の光輝は、實に女史が眼に唇に言語に擧動に全身に輝やき渡り、彼等をして歎美敬慕措く能はざらしめたり。吁光明の入る所、暗黑も亦容を變ず。ナイチンゲール女史來つて、スクタリーの病院は聖會堂の如くなれり。時としては兵士外科の手術を受くるを拒みて言ひ争ふことあり、女史來つて其床邊に立ち温言以て諭すこと三四語、彼は默して其手術を甘受せり。「彼女の來らざりし前には、呪咀罵詈劇しかりき、彼女の來りしより病院は聖なること寺院の如くなりぬ」と、是れ院内の一兵士の人に語りし所なり。「彼女は彼方此方に向つて語り、また更に幾多の者に向つて微笑を與ふ、然れど彼女は一同に向ひて斯くする能はず、吾等は幾百人相並びて臥し居たればなり、然れど吾等は彼女の過ぎ行く時其影の落つるを

接吻し、然る後滿足して枕に就けり」と、是れ他の一兵士の陸軍大臣シドニーハアバアト氏に語れる所ろなり。冬の夜ふけて大地墨より黒く、廣大なる戰地病院の室内、幾多の手負は疲れて眠り、幾多の手負は微かに呻吟し、陰惰慘鬱の氣滿ち渡るの時、白帽白衣の高潔なる一婦人手にランプを執りて、物靜かに過ぎ行く後を見れば、彼等は實に天使を目のあたりに見るの感をなしぬ。アヽ、其手中に四十年前曾てともされし一點の光、四十年後の今日に到りて猶燦として照り渡る、慈仁の光は如何に熾なるよ！。

千八百五十五年の春クリミヤに赴ひて野戰病院の看護部を組織するの際、女史は久しき勞働の結果として熱病に罹りしが、更に其場を立去りて歸國するを肯せず、痊ふするや、直ちにスクタリーの病院に歸りて、千八百五十六年七月英軍土耳其を引拂ふ迄は、終に其場に踏とまりぬ。女史の戰地にある、殆んど二年に近かりき。

女史の英國に歸るや、他の婦人の未だ曾て受けざりし全國の大歡迎を受け、英國は上女皇より下倫敦裏小路の下等勞役者に到る迄、爭ふて之を祝福せり。女皇は感謝の手書と金剛石を嵌せし十字架を贈り、（十字架には「慈悲ある者は福也」との聖經の文句を皇婿アルベルト親王自から書かれたり）、土耳其帝も寶石を縷ばめし腕環を贈り、其他各地の有志より贈り來れる贈物謝狀は山をなし、有志者は義捐の金五萬磅を醵めて女史に寄せ來れり。然して女史は此五萬の金を以て、聖トーマス其他の病院に寄附して、看護婦養成の資に供しぬ。

多くの辛勞を以て多くの人の生命を救ひたる女史は、自から健康を傷り盡し、且女史の性質元來退隱を好めるが爲めに、其後今日に到る迄女史は公然世人耳目の表に立つこと多からざりき。然れども有爲なる女史は多病の故を以て安息せず、而して健忘の世も女史の名

をば終に忘れざりき。政府は印度軍隊衛生の事に就てしば〳〵女史の助言を求め、歐米諸國の政府に亦しば〳〵女史に向ひて軍隊衛生の事につき助言を求むる所あり。然して女史はクリミヤ以來深く心を軍隊衛生及廣く衛生問題に潛め、實際にまた考究に種々得る所あり。女史の著はせる所、「看護につきて」「病院につきて」「印度に於ける生死」「病床論」等數篇、其他政府の詰問に答へし意見書數篇あり。皆實地より來れるもの、精密適實、個人に於ても、官廳に於ても、今日に到る迄、其の道の良嚮導たらずんばあらず。女史は實にクリミヤ戰爭に於て、萬餘の生命を救ひたるのみならず、光明の摸範を永く後世に傳へしのみならず、戰爭以後四十年の生涯また實に有要の生涯なりき。

女史がクリミヤ戰爭の初めて戰地看護の實例を天下に示せしより十年、歐洲清國の有志瑞西の國都ゼネヴァに會して、戰爭に於ける疾病者及負傷者の狀態を改良するを圖り、渾て戰地病院は中立とし、其內にある救く之を干繫する者は戰鬪以外の者と做すことに定めたり。是れ所謂赤十字の濫觴にして、ナイチンゲール女史は此道の先進として赤十字社創立の事に直接間接の助をなせること少なからざりき。赤十字！戰爭猶已まず戰備愈々盛なる十九世紀の中央に於て、遥かに四海一家萬國同胞人情公義の平和帝國の徽光をホノ見せたる暗夜の燈臺！。ナイチンゲール女史のともせし光りは、此燈臺の光のもとゝなりぬ。（完）

文藝

エポニンヌ

無一生

當時の佛國が古代ゴールと稱せし時代に當り羅馬の怖ろしき暴君ネロンの逝去の前より逝去の後に亘りし動

亂の頃ひ佛國ランゲルの近傍に生れしシュリュス、サビニュスは暴動の一方の大將として知られけるがサビニュスはシュール、セザルの子孫なりと主張し而して自ら稱して帝王と云へりとぞ閑話休題サビニュスは散々に戰爭に打負けて復敵對ふべき力もなくゴール人の蜂起漸く茲に鎮定し暴動の巨魁等は皆夫々に死刑を申渡されたるが就中サビニュスの門閥なるとは彼の一身をして危からしめ到底寛大の恩典に浴すべき希望の絶えたるにぞサビニュスは吾家に火を放ち而して自分一人の外誰にも知られざる窖に其身を避けしにぞサビニュスは現世に希望の綱の絶果てゝ吾家に火を放ち火中に投じて最後を遂げしとと信じ誰とてサビニュスが地下の隱家に難を避けたりと思ふ者はあらざりき。

サビニュスが召使へる二人の忠僕は暗黑なる地下の隱家に主人の供をなしけるが抑も古代ゴール人の時代に當り其朋友同士乃至は主從間の情誼の濃かなると大方ならざりしが況してや夫婦は同心一躰と云ふ程なれば人の妻たる者が其夫に對するの情誼もオサ〳〵前者に讓らざりしなり。

サビニュスの妻なるエポニンヌは所夫が最後の凶報を得て其悲嘆は匆々に譬ん方もあらざりしがサビニュスに仕ふる二人の忠義なる家來は食物なんどの貯蓄をなすため時々地下の隱家より娑婆へ立出でけるがエポニンヌが所夫サビニュスの最後の凶報を得し以來悲嘆の泪の乾く間とてはなく日々に衰ろへ果てゝ軈て玉の緒の絶えなんとこそサビニュスに訴へければサビニュスは一人の家來に吩附けてエポニンヌを慰め且つはサビニュスが未だ現世に生存らへ居る由を告知らせんとてサボニンヌの許へと遣はしけり。

コノ嬉しき吉報を得て天に欷び地に喜びつ凋み果てたる女郎花エポニンヌの生氣頓に元に復し暗夜に紛れ窃に忠僕に誘はれ地下の隱家へと急ぎけるが何時かエポ

ニソヌの形影はサビニユスの眼前に現はれぬ「オヽ懐しの吾夫よ善くも無事にて在はせしそ妾は御身と苦樂を俱にし御身の非運を慰め參らせんがために妾は妻たる神聖なる妾の權利を恢復せんがために妾は妾の生命を御身に献けんがために參り侍るなり」と吁サビニユスは如何に感嘆を表し如何に謝恩を表さねばならさりしそ吁瞬く間にサビニユスの四圍の光景は如何に變化せしぞコノ廣やかなる窖も今將たサビニユスの眼に悲慘なる光景を呈せざりき然れどもコノ窖が今日以後エポニソヌの住居たるを思ひ一念玆に至ればサビニユス轉た悵然たり。

斯くてサビニユスとエポニソヌの兩人は如何にせば彼等夫婦の安全を圖り得らるべきと商議を凝らしけるが兎にも角にもエポニソヌが全然世間に遠かり其形影を顯はさゞるは世人の疑惑を招くの基にて最危き業にてありき去れば彼等も此邊に心注きければ夜陰にのみ窖を訪問るゝことに評議一决しけるがエポニソヌの住家は窖より路程遠く隔りて徒歩にて五里の遠路を歩るかさるべからず吁エポニソヌは如何にしてコノ遠路の疲勞に堪得べきぞ吁膽小き纎弱き女子の身にて危險を冒し難澁なる然かも夜陰の旅路を重ね得らるべきか吁エポニソヌは如何にして人目を晦まし其擧動其秘密を隱し得らるべきかエポニソヌは總て是等の障礙に打勝てり其は他なし愛情と節操と相合するときは彼ばかり勢力ある發動躰なる愛情と節操とに依りて導かれたりしが故なり。

去程にエポニソヌは斯く爲すべし爾爲さるべからずと良心の命するところは敢て辭せずして之を爲せりエポニソヌは定例の時刻を違へず規則正しく窖を訪問れけるが而して亦吾家に遠かり形影を隱しても世間の疑惑を招かざる様に必要なる用愼を爲し得しときには毎度數日の間窖に流連せり最愛の吾夫の見參に入らんと

て出行くためにはエポニンヌは有らゆる障礙に打勝てり嚴しき冬の天も雨も將た風もエポニンヌを抑留め訪問の時刻を遲くせしめ得ざりき吁エポニンヌは身躰戰き氣息も喘ぎ〳〵纎弱き傷めたる足を漸ッと引すりながらも猶優しき微笑を洩らしつゝ自個が疲勞自個が苦痛を押隱さんと努め否寧ろ適切に之を評せば最愛の所天の坐側に在るを思ひ是等の困難を忘れ果てつ窖に着きしときにコノ塲の光景はサビニユスの眼中に如何に映りしぞ。

コノ祝福は九ヶ年の間世間に知らるゝとなくして繼續せしが一朝終に不幸なる機會に遭遇しコノ隱家を發見されサビニユスは鐵鎖に繫がれて羅馬に護送されエポニンヌも亦所天の後邊に引ッ添ふて行きしが指折り數ふれは九ヶ年以前サビニユスに對して判决されたる死刑の宣告は執行されたりしが時の帝王ヴエスパシヤンはサビニユスを寛典に所し得べかりしかどもサビニユス其人の如き種々の口實を有し帝國に對して一種の勢力を有する者を宥免するとを欲せざりきエポニンヌは帝王より所天の一命を乞ひ得ぬので帝王に向ひ「吁ヴエスパシヤンよ哀れ願はくは妾も所天と倶に刑せらるゝの恩惠を妾に垂れられんとを彼の暗黑なる地下に棲息するよりも御身の支配の下にある帝國内に在らんは更らに妾が身に取りて一層辛かるべし」と言ひて所天と倶に刑せられんとを乞ひぬ。

同感

筑峯女史

とざしせぬ御代の民草生ひ繁り浦やす〳〵とこぎ渡る海人も木樵りもすめらぎの御威稜の旗を家每にかゝげていのる大君の事なき世々の有難さは軍習ひの人々も其期滿つればいとまを給はりてなれし故鄕に歸り來てうからやからと樂しげに月日を送るほども無く先つ頃

より高麗唐國に事の起りてより再びめし出され行きにしあとの言の葉をひろひあつめし海人が妻或る日の事わらはが許に尋ね來てつれ〴〵をなぐさめんとての物語りきゝ居る折しもその年八十近き老婆のいと悲しげなる面もちにて同じく尋ね來ついともあはれの話をば先づ一通りきゝてたべと語るを聽けば我が一人り子先つ年徴兵より歸りしかばやれ安心と喜ぶひまも情なやまたも此頃めし出され其後の様子いかにやあらんと朝夕に杖柱とも賴みてし甲斐こそ有れやなき人と兼て覺悟はきはめても老のくせとて案じられ且つは貯へとてもあらざれば賴むは悴たゞ一人り是よりは誰をよるべに定めなき露のいのちをながらへてなに樂しみに世にあるべきとかこちて居たる折ぞしも屆くゆふ便はまがひなき悴が手跡と喜びつゝ受とりたれど見へわかぬ文の様子何卒讀てきかせ給はれとふところさぐりとり出すを見ればあすより敵地に赴き侍るなり再びめぐり逢ふ事はあるともなきは身の覺悟兼て萬一の時の用意にと上より給はる金のその中を少しつゝたくはへおきしも今となりては不用故いさゝかながら母上に差上まつればいづこなりかたき所にあづけをき行く先短き御身の用に爲したまへ又我れ戰死すと聞き給ふとも力を落さず保養して長壽安樂を保ち給へかし抔こま〴〵と認めつゝ金子の手形とり添へていともやさしき文のあと人の上とはいひながらそゞろあはれをもよふせしかまことを讀まば老婆のなげきのほどやいかばかりと案じられたゝよきよふに解きてきかすれば金子の手形をおし戴き貧しき母が身の上を心にかけて送りしよなやかてこの冬にもならば歸りや來ん布子のかびなどほしおかんと屈みし腰をのばしつゝさきの愁に引かへて喜ばしやと急ぎ行く知らぬは佛の不便なれど海人の妻とも語り合ひ憂を分ては彼の妻は我が夫もそれ等の人とももろ共に戰場にや赴きけん妾は夫が事無くて歸り來まさ

ん日を待ちてあけ暮れ獨りもの淋しきつま戸をばあけよ〳〵と打ちたゝく夜嵐に幾度となく驚かされ夢とも無く現ともなく明すこの頃村長の話しには海陸の軍人の勞を慰むよしもがなと種々の品をば送るにつき望ある者は何にても贈れよかしと有しかは及ばずながら少しにても多く贈らばやと朝に夕べに磯邊に出でひろひあつむるうろくづに夫を思ふ海人の潮なれ衣かわく間もなぐさむよしも荒浪に稼ぎ侍ると云ひつゝもヨヨと計りに泣きしつむをなだめて歸し侍りしが跡にて二人りの心のうちを察しては想ひやることそとはりなれ我がはらからも幼きより海軍に志さしこその冬日頃の志願成就なし數多の人の中よりもより出されて橫須賀の海兵團へとぞ赴きけるわらはもいたく喜びて國の爲めなり家のため勉めよ勵めと折々にいさめて文をば送るにつけ己が勤めのひま〳〵に送り越したる文には幾度も會ひ侍れど久しく見ねばはらからはいねにしつら

ん雨の夜や風の吹く日には尙更に想ひ出らるゝは兄弟の情の常なんめり近きうち一度尋ね侍らんと思ふ間もなく此の度の事の起りし初めつかた送りし文に兼てしる心つくしの甲斐ありて渡るもやすきもろこしや高麗のしこ草なぎ拂ひめて度くかへる日の本の花の都の九段なる名も靖國の御前にてま見へ侍らん嬉しさといと雄々敷も勇しくも書きて有しを見し時は已にわらはも共に勇みたち打ちよろこびしがサスガ女の情なれや老女や海人のなげきにつれてはらからの事も思ひ出られ一きは物を案じけるかくては果てじ我れながら女々しきかぎりなりはらからに代はりて兩親を勞はり參らせ家の守りをなすには如じと夕飯を父母にすゝめまつり幼きものともろ共にふしどに伴ひ爲すべき事も終へしかはひとり庭に下りたちそこはかとなくさまよひつゝはるかの海草をながめ侍れば日はとく暮れはてゝ浪音高くいさり火の影のみほのかに見へていと暗く又も外

つ國にある人々の事の思ひ出てられてしばし愛に沈みつゝ歸るほども鳴く虫につれ松風のさと音して宿れる露の村雨に驚きと見れば雲間を出づる月の影もあはれに夜はいとゞふけにけり

さゔおあの少年（上）

將來我國ノ長詩篇ニ於テ最モ多ク用ヰラルヘキ律語ノ調ハ七々ナルベシ。ワガ見ル所ニテ英ニ於テ之ニ應スルモノハ五脚ノ律語ニシテ、佛ニ於テ之ニ當タルモハ六脚律ナリト信ス。ユヘニ今本篇ヲ譯スルニ當リ、原文ノあれくさんどらん調(即チ六脚十二綴)ナルヲ七々トシ、くゎどりゅめーさろナルヲ五々トセリ。元來西邦ノ詩篇ハソノ異調律語ノ配布ニ關ス。今長短緩急ヲ原ツク所ニトルモ亦翻譯ノ一義ナランカ。無益ノ空勞ナリトノ謗リハ免ルヘカラサルモ、馬鹿正直ナル語ハ翻譯者ニトリテ必スシモ不名譽ナラサルベシ。

本篇ハ佛人あれくさんどろ、ぎろー Alex. Guiraud. ノ作ナリぎろーハ劇詩人ノ一、悲劇數曲アリ。れまかべ Les Machabées ノ如キハソノ有名ナルモノニシテ、其他歴史小説、哲學上ノ論書アリ。本篇 Le petit Savoyard ハ佛人ノ好ンテ誦スルモノナリ。殊ニ初二章ヲヨシトス。

注。さゔぉあ Savoie ハ現時佛領ナレド、今ヨリ三十年前迄ハさろご聯邦ノ一州ナリ。故ニさゔぉあヨリ佛國ニユクノ語アリト知ルベシ。

出立

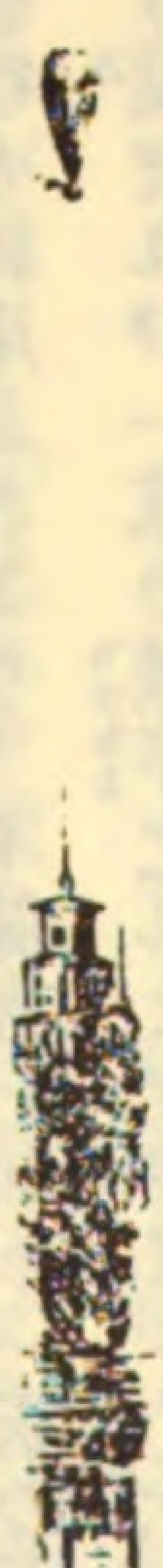
武田くら譯

さあ坊や支度して、ふらんすへいつといで。
何もたぬ身の母の愛着、何でそなたの爲にならう。いづれを見ても幸だのに　こゝにをつては苦みばかり。
だから坊やいつといで　そなたの爲なれば。
このはゝの身のちゝで、そなたがたりるだけは、
わたしのうでゝ堪え得るかぎり、できる仕事でくらしたうちは、そなたの笑がほをながめて見ては、うれしさゆへにつかれもわすれる。
それゆへにたれひとり、そなたをはなめるのを、いゝかげんにやめなさい、といふ人はかつてない。

しかし私はやもめの身分、うれしいとても力はない。
かなしくて病身で　まあどこへゆかれうぞ。
そなたの爲にどこへゆかうぞ　ゆくうちあるも同しく
貧家！　さあこの母をのこしておいて、ひとりのたび
にさうをあのわらべ、

いつといで神樣が、導かむ處まで。
しかしどんなに遠くいつても、ぬしなきかまどにまつ
身をお思ひ。まこゝへおいで、わかれるにしても　も
一度一處にだかしておくれ。
かくいふ母はわが子をだきて、額に口をあてがひ乍ら、
坊やこれはつゝがなく　いつてくるいはひだよ。
このしたのこの大きい　かしの木をよくごらん。
そこまでそなたを送りませう、これがわたしのねがひ
だから。はやすき去つた四年いぜん、こゝまでおくつ
たそなたの父は、
おとつさんはまあ坊や、とう／＼かへらない。
もしおとつさんがなほこゝにゐて、そなたのそだつを
見てくれたなら、何でそなたと別れる樣な、かなしい
事があるものかい。十歳のそなたがつきそひなしに、
この世の中に旅だちてゆく。
このはゝは神樣に　ゆくすゑをいのります。
もし神樣のおたすけなくば、かわいそなたはどうする
ぢやらう。うき世に多いわるものの中に、たつたひと
りて母さへそはて、苦勞せうとてたびだつそなた、い
としわが子を手ばなす此身。あゝ何故にこのわたしに
は、そなたをそだてるかてもないのか。
これもやつぱり神のおさだめ、たゞ從ふよりしかたは

ないが。
わかれとてもうなくな、なみだをばようふいて。
お邸らしい御門のわきに、滿足らしい顔つきをして、
そりやわたしをば思ひいだして、かなしい事もあらう
けれども、かねもつ人を動かすために、とにもかくに
もうたはにやならぬ。
そなたの身には命がつらくも、堪えうるかぎりうたつ
ておくれ。そなたの手にはまるもつとと、そなたのか
るき手にもつをもち、あゆみながらに一生懸命、うた
くりかへしたのむのですよ。うたはわたしがそなたを
だいて、ねかしながらにきかしておいた。
もしもわたしにもとの氣力が、なほも殘つて少しもあ
らば、わたしは自分でそなたの手をば、ひいてゆくの
は望みなれども、しかし今では旅だつたなら、三日も
つゝける事はできまい。その時そなたは旅路の中で、
母をのこしてゆかねばならぬ。まゝこのわが身このわ
たしはな うまれた土地にしにたいわい。
さらばさらばよ、これがおはりの わかれのことばい
とまごひぢや。神がそなたをわすれぬ様と、思ふなら
ばわすれちやならぬ、まづしいものゝ、たからといはゝ、
ひとがあたへたわづかのものと。富たる人におねがひ
申さば、神の御名にくだされようと そなたの父はそ
ういつたが。さらばめでたく、おわかれですよ。日は
はやすでにむかひの山に おちゆくほどにくれゆきけ
り。このとき母はわが子にむかひ、さらばわかれとい
ひたりければ、わらべは大きなあのかしの木のあなた
の方にたちさりけり、おとふりかへりおとふりかへり、
なみだをひとつこぼしもせずに。



家ホーム政

美麗なる家庭

御身は如何なるホームを愛し給ふやと、人に問へば、答は誰れも全じかるべし『平和なると天國の如くにして、笑ひの聲の常に滿ち、安心なると、城の如き、外界の風波の入り來らざる所を愛す』と。

かゝる樂のしきホームも、あながち理想のみにあらず。妻君が、下女より起る怒、小供より來るむしやくしや、夫の思ひ違ひ、客の不愉快に堪へ得る時は、即ちその手は平和なり。今日の妻君は内の事を爲すの外、社會の事にまで力を盡さゝるべからざる時節となりたれば、餘程心して神系を過勞せざる樣注意爲さゝれば、自分ながら欲せざる怒を發し、制せんとして制する能わず、遂に習ひ性となるに至るべし。それのみならず、身軆をむりに用ふるより、不健康を起し一家の財政之れより亂だれ、一家の秩序之れより破ぶれ、平和序で去るに至らん。さなきだに、婦人の子供を養ぐくむ業は、容易すき業にあらずして、眞に子供を完全に近かゝらしめんには、力の限ぎりを極むるにあらざれば、能ふべきにあらざるを、外の業に迄力を盡くす人ゝ、神系の過勞は、殆ど免ぬかれざる結果なり。身軆を損し、一家を不和にして、社會に盡くすは、一方より云へば感ずべき業に似たれども、獨身ならぬ妻君たるものゝ務としては、その得る處、むしろ損する處に償はざるべし。故に世のため、人のために盡くさんと思ふ人は、先づそれ丈けの時間を作りて、力の餘りを以て之を爲すの心がけこそ肝要なれ。

多くの時間を作くるの法方は、第一秩序を定だめ、一物を探がす毎に、家中大さわぎを爲して、無益の時間を費やさゝるにあり。

第二各上に家務を負擔せしめ、妻君が無益の腦を煩わさゞると、たとへば庭の掃除と、客の迎いは書生の役にランプの掃除と、小供の守は、兼務のと、おさんは洗濯ふろを受け持つこと、事業を定だめ、己れの爲すべきとは、他人の注意を受けずして之れを爲し、己れの出だしたるものは、自ら各々之れをしまい、己れの損わしたるものは、己れ之れをつくろふ等、家の憲法、嚴しく定め置かば、一々妻君の干渉を待たずして、怒聲なくして家内自然に働くべし。諺に善く治さまりたる家の車は、音なくして廻ると云へり。内輪にでて〳〵としたる音あるは、善く治まりたる家庭にあらず。

第三は、小さき事を見逃がさゞるの注意を有すると、たとへば竈の破所を生ぜば、大破に至らざる内に、妻君に告ぐると、垣の倒れんとするものあらば、倒れざる内に妻君に告ぐると等、精密に下女書生に敎しへをかば、經濟の點に於ひて、妻君の助かること少なからず。少しの事を見逃がすは、大なる破れの生ずる基なればなり。

第四は、適當の休業と、安眠を得ると。事を多く爲さんと欲するより、休みをおしむは、止むを得ざるとにして、小供のやすみたる間に、早く爲さんと思ものは、安眠の時間をさくも、又たむりならざるとながら、精神を過勞し、身躰をおとろへしむるは、之れより甚だしきはあらじ。

第五は、事業を負ひ過ごさゞるとなり。賢しこき婦人は、己が力を計りて、物事を引き受くるが故に、人に持ち上げられたりとて、矢たらに働かざるかわりには、己れに出來得べしと信じたるとは、過ぎたる謙遜を用ひずして、せつ〳〵と之を爲す。人に持ち上げられて、無暗に働ざるは、已に定まりたる事業を盡くし得ざるの恐あるが故なり。己れを信じて働くはその天職を盡

くすの決心あるが故なり。

百の馬力に動でかざる大岩も、音かすかなる雨のためには、知らざる中に穴を穿がち、遂に砕け破ぶるゝ如く、如何程躰力强よく、忍耐强よく、學力あり、智慧ある婦人と雖も、毎日力に餘まりたる業を爲しつゝけては、いかで供給を欠がざるを得べき。その時は一家の破壊し、ホームに嘆聲の聞こへ、怒りの聲、悲しみの聲の湧き出づる時なれば、理想的の家庭を作らんとならば、妻君たるもの先づ此邊に注意を要するなり。

西洋物質文明の一斑

釣り錢を入るゝ器械

大なる商店にても、釣錢を取り遣り爲すに。一々疊の上にをき、若しくは板の上に上するは、我が國一般の風なれども、數多き小錢を拾ふ時、殊とに手袋等をはめて釣錢を拾わんとする時なぞは、大に不便を感ずるとあり。第一圖に示めせるは、幾個の酌錢を入るゝとも、一時に受くる人の手中に入る、最とも簡便なる器械なり。



即ち第一圖に示めせる(イ)は、鐵もしくは銅類にて作れる皿にして、僅かにその兩端を釘にて、外部の器に止め付け、自由に廻轉するとを得るに供す。且つ(ロ)の茶碗樣の器は、底なくして、その一端は大なる器に接し、且つその小なる器は、上下自由に運動せしめ得る事ガンドウ提灯の如くにして、その運動するに隨がいて、上の蓋は運動自由なる樣に出來ず。そは大なる器の中心は、空にして、中には棒ありて、小なる器の一端に接し、上下に運動の際、上なる蓋をつき動かす樣に付かけたり。故に釣錢を得んと欲する人は、釣錢

の置かれたる後、下を小なる器の下に受けて、之れをつき上ぐる時は、蓋は覆へつて、釣錢は手中に落つるなり。簡便を欲する人々は、之れを試み給へ。

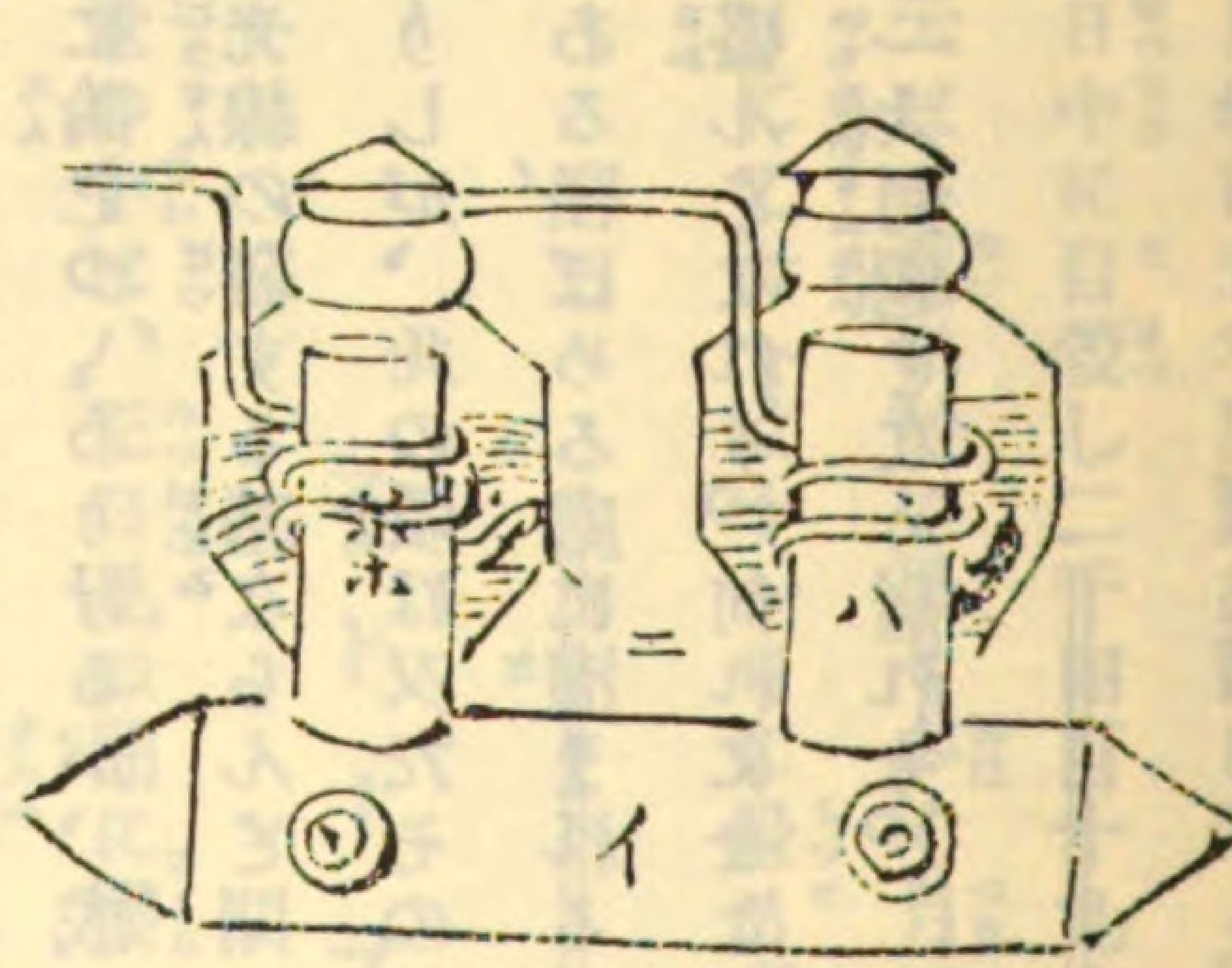
空中を飛ぶ器械



圖に示めせるは、ツループと云ふ人の發明せし、鳥の形どりし空中を飛ぶ器械にして、腹部に當たる弓なりの所の兩脇は、ガスにて滿ちたるが、そこの餘りに重力あり、且つ空氣に抵抗するが故に、速力をそがれ、一時間に二十哩より五十哩迄を走るに止ると雖も、とに角く十九世紀物質文明の大なるを知るに足るべし。

空氣の消毒器

器械は種々發明せられたり、發明者は種々に腦を碎だきたり。されどもニカワ製造所の臭さきにをひ、罪人獄殺所の不潔なる臭ひ、屠牛場、其他臭氣の發する室の臭氣を去りて、人身に害なからしめんとは、中々易すからざる業なり。圖に示めせるはニユーヨークにて發明せられしものにして近か頃流行せる臭氣よけ器械なるが圖中(イ)は空虚なる箱なり。之れを臭氣ある室の外面につるすに、室の中より(ロ)の穴に通ずべき穴を明けたるが、此圖には示めさゞれども、團扇仕掛ありて絶へず室内の風を、穴の中に送くる樣に出來たり。(ロ)より入りたる臭氣が、道を求めて、(ハ)に入る、そこには、火氣ありて、外部の(ニ)なる器の中にある、松脂を溶解しつゝあり。然してそこを通り



て來れる臭氣は、松脂の臭と合し、(ホ)なる管を通じて、外界に出づるに、松脂は臭氣止の功あるのみならず、大に消毒に功あるが故に、近傍の空氣をして、清潔ならしむ。市中に近かき處にある臭氣物製造所にては、道德上之れを試むべき義勢あらずや。

學藝片々

大陽の黑點

（學者間の大問題）

大陽に黑き數個の點の出來し事は、とくより學者の目に入りし處なるが、先つ頃一の不思議なるとを發明せり。そは黑點は常に一樣にあらずして、時には五六個あり、時には皆無なるとありて、併かも最も多數に見へし後は、必ず皆無となりまた再び元との多數に復し、此の變轉は必らず七年毎に一周して、違ふことなし。更らに不思議と云ふべきは、天空の遙かあなたにか丶れる太陽の黑點の有無は、地上にある磁力に關係を有すること是也。大陽の黑點の最も多き時は磁石の動き方非常に多くして、黑點のなき時は、磁石の動き方少なきを見る。天文學者は此の奇なる現象の原因を種々に論じつ丶ありけるが、或る人は、黑點を以て太陽の光線の發する基ならんと聞ひて、その說一時は盛んなりしが、此の頃は又たその黑點は、湯液躰が太陽面のある窪ぼめる處に溜まれる爲めならんと云ふの說や丶盛んとなれり。何れにせよ、太陽の黑點は、學者間の一大問題となり居れり。

萬國自殺の原因

自殺の原因を知らば、以てその國の社會の有樣を伺ふに足るべし。有名なるバーカー氏は萬國自殺の原因及

びその數を委しく統計にあげられたり。即ち十萬人につきデンマークは二十五割八分、スレスウ井ツグホルスタインは二十四割、オ、ストリヤは二十一割一分、スウ井ツツランドは二十割〇二分、フランスは十五割七分、ゼルマンは十四割三分、ク井ンスランドは十三割五分、プロシヤは十三割三分、ビクトリヤは十一割五分、ニユーサオスウエールは九割三分、バヾリヤは九割一分、ニユージーランドは九割、南部オ、ストラリヤは八割九分、スウエデン八割一分、ノールエーは七割五分、英國及ウエールスは六割九分、タスマニヤは五割三分、ハンガリーは五割二分、スコツトランドは四割、イタリーは三割七分、チダーレンドは三割六分、合衆國は三割五分、ロシヤは二割九分、アイルランドは一割七分、スペインは一割四分なり。而して歐洲に於ける自殺の原因は百人に付狂氣十八割、飲酒十一割、賭博等の罪惡に起因するもの十九割、病氣によるもの二割、心配より起るもの六割、家族の不和より起るもの四割、貧困によるもの四割、無智によるもの四割、元因の解からざるもの十九割にして、合衆國の自殺は五年間の統計によるに平均五千三百八十六人は日中に自殺し二千四百十九人は夜間に於てし時候にて云はゞ夏に於て最も多く月にて云へば六月に最も多く日にて云へば十一日に最も多しと云ふ

ストーブの準備

世の中は、三日見ぬ間に櫻かな。日月の變るは三日四日の間にも、中々に速か也。今日は團扇を愛して尙ほ暑つさ堪へ難きも、明日は綿入小袖の時候となる怠惰なる妻君が氷の夢のさめやらぬ内に、もはやストーブ炬燵の世の中となる。今日の暑のみを思わず、早くストーブの用意を爲しをくは、賢しこき用意ある婦人な

り。

久しく物置の隅にをきしストーブを出だし見るに、銹と塵とは、鐵の色をなからしめけり。手襷手に取り、かひ〲しく庭先に出で、塵拂ひにて先づ塵を去り、西洋店より十五錢のストーブ墨を求めて、その幾分を鉢の中に水にて解かし、靴皮毛の如きものにて之をストーブ全鉢に塗り、かわきたる處を更らにかわきたるはけにて磨がきて、つやを出だし、その上を金巾のきれにて、ぬぐひ取るべし。ストーブは如何にストーブ屋にて、丁寧に磨がきたりとて、一月もたゝば、又た〲銹の來るものなれば、高價を拂ひて、ストーブ屋へ度々頼のむより、むしろ自分の手にて磨がくに若かず。一本の墨は五六度以上の用に立つべく、大したる手間も入らずして、運動の一助となるの功あり。銹の食ひて益にたゝざるに至らざる前、早く今頃より手入れを爲すべし。

手藝案内

二個の仕事袋

爰に西洋人が常に自ら製して針道具等を收むる用に供し、最も簡易に製作し得らるゝなり、今其製作法を記載すれば左の如し。

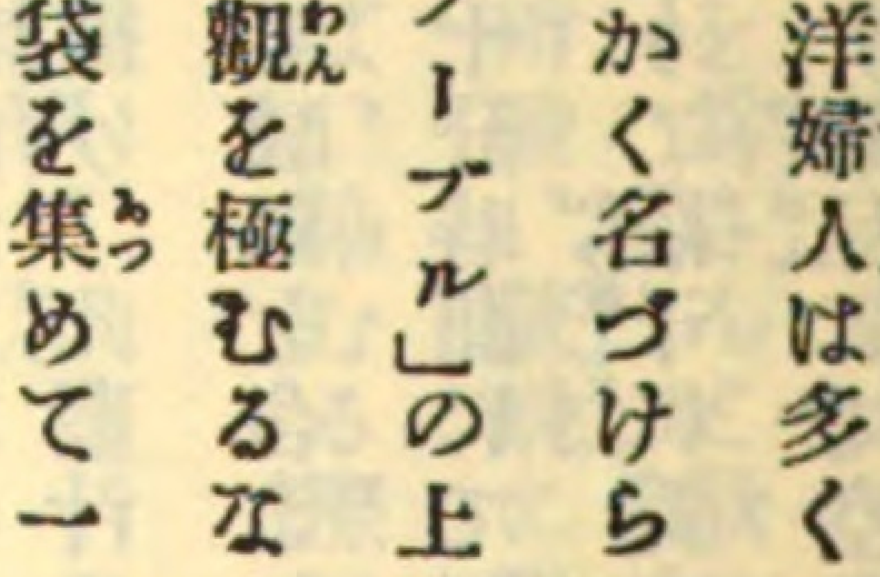
第一圖は口を閉ぢたる通常の仕事袋（ウヲーク、ベッツ）なり、此中に編絲や編物を收むるに便にして、一枚の「ハンカチーフ」を以て容易に製し得べし、美麗なるものを製作せんとならば、一枚の絹「ハンカチーフ」を取り、（其色は緑色なり淡紅色なり其人々の嗜好に任せて宜し）平に擴げて「ヘム」縫を爲し（ヘム縫の法は一度記載したる事あれども、



一

因によりて其畧法を記せば、「ハンカチーフ」の縁端より二寸程の所を縦横ともに地糸三本宛針にてすくひ抜ぎ、すくひ抜ぎたる糸の跡は明かに四方に井桁の形の筋を現はす、之を糸抜と名づく、扨抜ぎたる糸の筋を度とし四方より縁邊を折返し先づちつと躾糸をかけ臺の上に載せて、一方を確と止め接針の細きものにて絹の双子糸にて接糸の太さ程なるを通し端の方より抜ぎたる處の糸の筋と、折りたる地とを最も細に絡り緊と糸を引く時は三角の穴を生す、又四隅の處四重となれば切合せし二重とし、縁を折り込みて緊るべし四方とも斯の如くして則ち「へム」縫を得るなり）「へム」縫を終らば其「へム」縫したる所の下に廣き三四分の「リボン」が通り得らるゝ紐通を縫ひて袋の開閉を自由自在ならしむべし、斯の如くにして其中に物を入れ「リボン」の紐を引きしむる時は、挿圖の如く頂上には「レース」形の皺を生し、其の美麗なること他の袋の上にありと知るべし。

第二圖に示せるものは旅行用仕事袋（ツラヴエリング、ウヲーク、バッグス」）と稱し、是れ亦仕事道具を收むるに便なり、これは西洋婦人は多く旅行用とするが故にかく名づけられたるものか、又「テーブル」の上に置きても頗ぶる美觀を極むるなり、此袋は六個の小袋を集めて一個の形と爲し、各袋共に各其用を爲す工夫にして、其袋は第一圖の如く製しても宜しく、袋の形と大さは各々の嗜好に任せて宜ろし、通常行はるゝものを記せば、先づ直徑八九寸ある六角形の紙板三枚を取り、一個は白色の絹を以て蔽ひ、一は黄絹を以て蔽ひて之を縫ひ合せ、圖に示すが如く其の六角の面毎に袋を縫ひつけ（其袋の色は其人々の意に任せて宜しきも、通常白の線入りたる黄色を用ゆ）各袋の口は「リボン」の紐を通



して各袋を總括するやうにすべし、「リボン」は狹く其色は種々なれども黄又は白にするが面白し、又紐は「リボン」の代りに同じ色の他の紐を用ゐても宜し、かくすれば此の製作品の底は絹にて蔽はれたる紙板は各袋の爲に縫ひつけられて躰裁美事なり、殊に其各袋の中に綿や、絹や、針や、ボタン等が充ちたる時は殊更に見事なり。

新　染　法（續）

空色染法――空色の染法の一通りは前號に記載したれども、今一二法を記さん、則ち絹五百匁に明礬七匁五分の割合にて水に溶し、染らるべき品物を浸し置く事十分時間許にして取り出し、更に銅器に熱湯七升五合を入れ硫酸靛藍三合七勺五抄を混和して其液汁中に白羅紗或は白毛氈の切端を浸して湯煎（湯煎の法は何人も能く知る所なり、譬へば鷄肉を德利に入れて湯の中に入れて煮沸せしめ湯煎鷄肉「ソップ」を取ると等しく、之れも湯を満したる大鍋の中に小鍋を浮べて煮沸するなり）と爲し置く時は此毛織に器中の藍分を吸收して其色紺となる、此時毛織を取り出して、清水中に能く洗濯し又別器に熱湯七升五合も入れて之に眞珠灰（高き品にあらず、之に代ふに曹達一撮を用ゆるも宜し）七匁五分を投じて能く溶解し、以前の毛織を浸し此器をも湯煎と爲す時は、漸次に毛織より藍分を流出して水色藍となり毛織は白色に復歸するなり、此時を見計らひ毛織を引揚げ、此藍汁に温湯を増し然る後少許の酒石酸を投じて酸氣を含ましめ、此液汁の中に染むべき品物を浸し十分時間にて取り出し、清水にて能く洗滌し水氣を去りて蔭干に爲す時は染色を得、今一つ黄色血滷鹽と申す藥品にて空色を染むる方法を記すべし、絹五百匁毎に硝酸鐵（筆の序に硝酸鐵の製法を記さば先づ硝酸百目に硫酸三十匁の割合にて石焼の壺に入れ細き鐵釘六十匁を入れて鎔解すべし、釘を鎔

す方法は先づ僅に一二本の釘を撮み入れ壺中熱沸して釘を鎔化するに隨ひ二本或は三本宛漸次につまみ入れ其全數を投げ入るゝに餘り其度を超過することある時は、壺中忽ち大沸騰を生じ、液汁壺外に溢れ出る事あり、若し斯の如きことあらば少許の冷水を注入して沸騰を止むべし、首尾克溶解したる後は、暫時熱氣をさまし硝子壜に移して能く口を閉ぢ暗所に貯藏し使用に備ふべし）一合八勺七抄清水三斗の割合にて混和し、染めらるべき物品を浸し置く事二十分時にして取り出し、清水を以て能く洗滌し、更に他の桶を以て細末の黄色血滷鹽二十二匁五分を其中に投入し、熱湯少許を注ぎ悉く溶解したるを待ちて清水二斗五升を加へ又た硫酸七匁五分を入れて能く攪亂し、更に右の染品を浸すこと十分時間にして取り出し、更に別器に清水を滿たし前以て熱湯を以て明礬七匁五分を溶したるものを右の清水に和し此水中に右の染品を徐々に洗滌し去り前法の如く水氣を去り煖室にて蔭干にすべし、但し硝酸、硫酸の如きは頗ぶる劇藥なれば藥舗も其用途の明かならざれば販賣せず、確としたる實印なければ購求する事能はず、又硝酸鐵の製法の如き頗る危險の事業なれば、少しく染物を為さんと欲せば、藥舗に就きて求むるが安全なり、硝酸、硫酸に限らず劇藥を扱ふは頗る危險のものなれば、染むる際には餘程心を用ゆべき事なり。

袷及袷羽織仕立につき

本年は秋冷早く昨今は袷に單羽織か單衣に袷羽織を着用すべき時候となりたれば、婦人諸卿に各々袷の準備に急なるべし、これにつきて聊かいふべき事あり、袷及袷の裁縫法は已に先號に案内し置きたれば、少しく仕立方に便せんが為めに當今の流行を記すべし、袷は身巾を廣くすべし、若し狹くする時は下品となる、フキは飽まで淺きを流行とし二分位の處最も妙なり、裾綿

に仕立てんとならば三分位にても宜し、袷羽織は長き方流行則ち丈三尺六寸の着物には二尺四寸五分を標準とし三尺七寸には二尺五寸、三尺八寸の時は二尺六寸の割合すれば決して申分なし、襟巾は廣き方を尙び、則ち縞物にては一寸八九分、紋附ならば二寸ならば宜し、「サガリ」も長き方なり、縞物は五七分にて宜しかるべく、紋附羽織ならば一寸にも仕立なば澤山なりと知るべし、紋附の紋は個所は三紋七分にして五つ紋三分の流行勢力を有し、紋の大きさは男物にて鯨尺九分女物ならば同尺七分の見當最も流行する所なり。

袷及袷羽織に用ゆべき呉服太物は男物の袷にて上等は市樂、繋糸織、米澤糸織、之に亞ぎては結城紬、大島紬の類、羽織は紋附にて黑七子、羽二重、一樂、縞物に至りては官吏紳士向は淡色市樂、光輝織の類、商人向は繋糸織、節糸、次品にて結城紬、銘線の類、羽織裏地は緞子を最とし綸子、更紗市樂、甲斐絹、之に亞ぐといふ。

女物袷は上等を小紋お召とし、次は糸織、山絲織、價の廉なるは銘線、節絲、米琉球、秩父縞の類袷羽織には黑縮緬を第一とし小紋縮緬之に亞ぎ、羽織裏地は綸子第一等緞子の類、袷の裏地は花色絹が第一流行なりといふ、以下詳細なる事情は本號流行の栞中に精しとなり、右を參照あれ。

社交一斑

流行の栞

袷衣の案内

春夢

現今の呉服太物――日淸事件の爲に稍影響を及ぼし居ろにや西陣物に至りては昨秋に比し凡ての織出二割方減し（原料の生糸聊か騰貴の姿あり是又大に關係を有するか如し）隨て相場に於ては騰貴すべきが當然のやうなれども實際は大に然らざる所あり則ち取引に於て悉く差控への

傾向ありて市場不活潑にて賑しからず故に一割方の下落を見るに至れり又関東物に至りても前述の通りにして其相場は五七分の下落を顯はし取引に於ても不振の趣あり併し寒氣愈々加はり冬物盛行の候ともならば或は商況を挽回して凡ての成行活潑を見るに至らん歟扨目下各商店に於て仕入を爲しつゝある物品則ち流行の傾向ある呉服物より記さん

男物――相變らずは例の市樂第一の勢力を占む次は繋糸織及米澤糸織にして他は結城紬若しくは大島紬なるが如し羽織物は紋附に於て例の黒七子を最とし次は羽二重或は一樂を黒の五紋に染めて着用するの傾向あり、次に縞物は官吏紳士向には淡色市樂若しくは光輝織の少さき小紋を好み、商人向には繋糸織又は節糸の上等を撰み、稍價の廉なるものに至りては結城紬、銘線縞なるが如し、裏地は(勿論羽織の)第一繻子第二綸子第三更紗七子第四紺及其他の無地の甲斐絹第五小格子或は暈摸様甲斐絹等とす(但し書生羽織の裏には暈摸様甲斐絹其主位を占む)

女物――第一は夫の小紋お召にしてこれは益々珍奇の柄を出し益々流行の域に進めり他は縞お召にして次は糸織又は山繭織とし而して價の廉なるものは銘線、節糸、米琉球、秩父縞等にして是等は相變はらずの品、羽織は黒縮緬を最とし次は小紋縮緬にして縞柄に至り前記の小紋お召を着するもの多きが如く次は山繭織の淡色を好むの傾向あり且つ今頃向にはお召の小中柄を撰み少しく少りて縞八丈又は山繭織の珍絣最も面白く夫の琉球の絣は相變らずなり裏地は衣服に於て上等品には珍色の縮緬をつけ平地物には矢張花色絹にして羽織に於ても綸子を最とし上等は繻子下は甲斐絹なるが如し

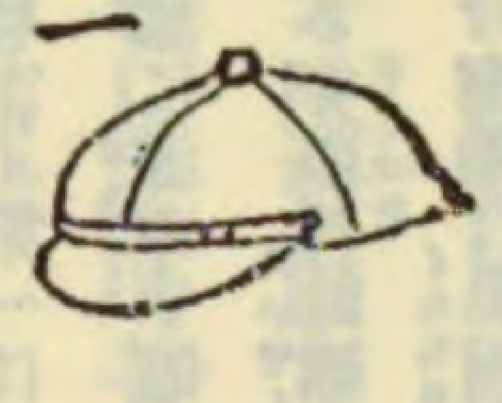
木綿物――例の如く男女を通して少しく記せば瓦斯双子、細双子は相變にらずして華美を好む向には糸入の瓦斯結城が多く用ゐられ而て當春一寸記載せし綿秩父縞は愈々流行の度を高めたるにや仕入最も多き由に聞けり其他は綿銘線には綿琉球にして此品の絣は平民的婦女子の不斷羽織に面白し

以上は向後の準備なるが目下の季節に着用するには夫の縞セル及フランネルにして其縞柄淡色地に朧絣、細き格子縞、又は珍竪縞最も流行せり若し之に羽織を着せんとならば男子に於て壁糸織又は平糸織を一重羽織に仕立、婦人向ならば黒縮緬の袷羽織最も好適す

流行の帽子

本年の冬帽子は種々なる流行品舶來し來り居れども一般の用となるものは黒の山高なり(第三圖)これは本邦人は禮式用にも不斷用にもちゐら

一



二



三

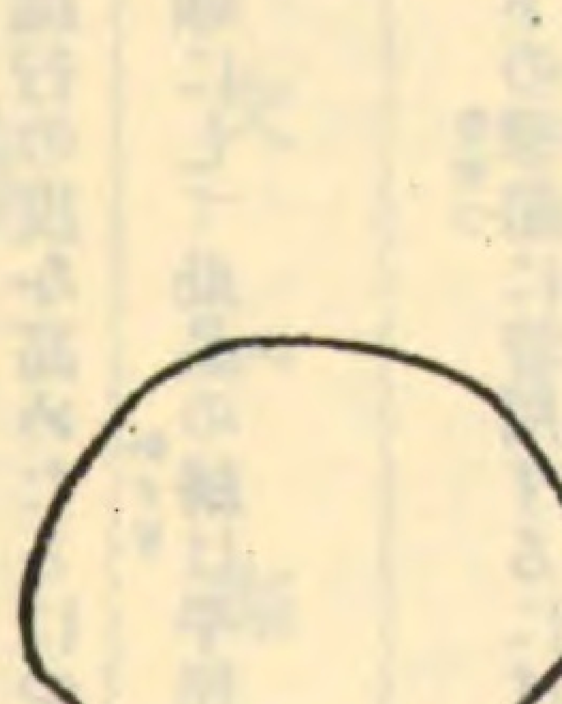


る、色は黒八分の勢にして其の他の色は二分と知るべし、山の高さは四インチより五インチの間を撰み、丸味にしてコバは昨年より稍廣き方流行、略帽には本年は鳥打は稍不流行の傾向となり目下日清戦争より流行の勢力を受けたるものか「キヤツプ」形流行し(一)(二)の如き形流行す、但し未だ夏帽子半分昨年の舊形を着用するもの半分の有様なればし詳しくは今少しく經過したる後に報道を怠らざるべし直段は昨年よりの銀貨下落爲替相場に異同を生ぜしより二三割の上進なり





二



三

婦人洋服の流行形

洋裝を好む婦人の爲に少しく本年西洋(重に巴里)に於ける流行の傾向を記載すべし



四



五

六



一)は外出服の袖を顯はしたるものにして袖は短くして最もふくれたるを好む、珠玉を以て飾りしものなり

(二)は「ヂンナー、ダンス」と稱する袖にして晩飯服と譯せらるれど一般會食する時に着せらるゝものなり、其流行形は袖の竪筋に腕の一部の肉體を露はし、大低濃綠色の天鵞絨にて仕立て、臂の處を天鵞絨にて結び目をつく

(三)は袖の形の裁斷を示したるものと知るべし

(四)及(五)は圖に示すが如き少女の服なり

(六)は婦人用外套

上　婦人用舶來品

帽子——地は羅紗にして眼庇は矢張廣やかなるを好めども本邦の婦人は奇異なる形を好まず、色は黑七分の勢にして三分は他の色なれども茶色人氣あり、山は高からず丸形よりも角形流行、扨斯の如く黑が流行する所以は、黑は他の色と異り四季を通して使用せられ得るの便利あり、又地味なる色なれば内外人を問はず之を尊重す

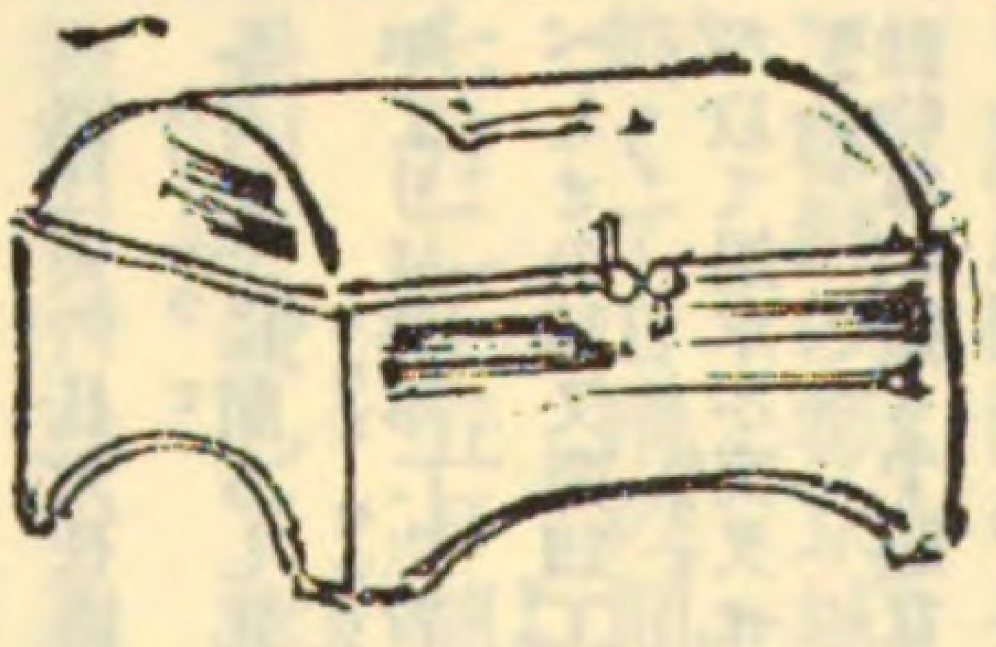
「プリシュ」——「プリシュ」は天鵞絨の如きものにて近來此品を用ゐる帽子の飾、小兒帽子、日本衣服の袢襟、手拭、襟口等に用ゐられ近來は之を下駄の鼻緒に使用せんとするに至れり、色は赤と濃鳩羽が最も流行す、一「ヤード」價は現今の處にて一圓三四十錢なりと

「シルク、ウエルウエツト」——絹天鵞絨なりこれこそ所謂本天にして下駄の鼻緒に用ゐある木天と稱するものは大低贋天鵞絨にして此絹天鵞絨にあらず、これは隨分高價なるものにして極上等に至りては一「ヤード」六圓以上なれども、通例日本に行はるゝは三四圓の間にあり、贅澤を衒ふ向は半襟や其他の細工物に使用せらるゝと聞く

「リボン」——色は紅、白、黑、桃色、トキ色最も行はる、一「ヤード」一「インチ」巾にて上等十二錢下等七八錢位なりと

手袋——は黑及茶の絹又は「カスメヤ」製(毛製)最流行

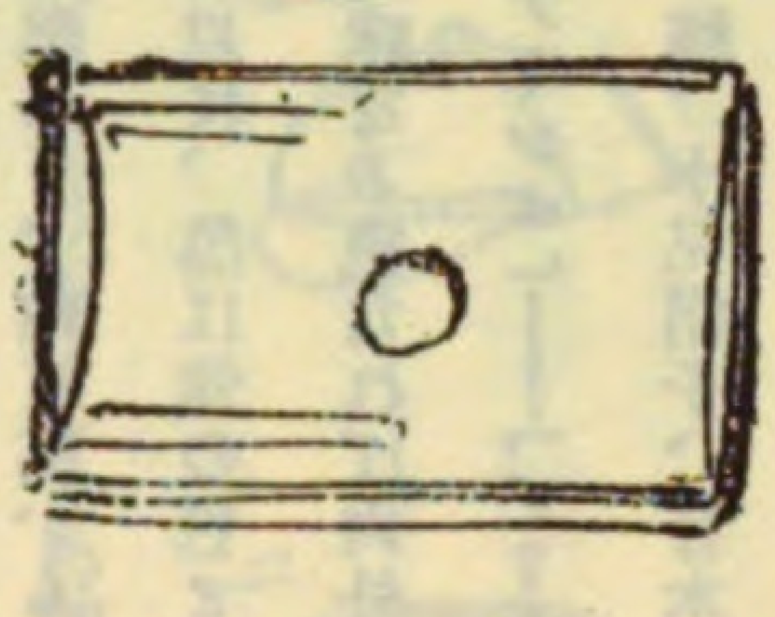
ハンケチ——麻製(一ダース三四圓より七八圓位まで)が實行多く、其上は價に限なけれども七八圓以上は流行といふに至らず)次は絹なり



專賣特許の石鹼箱

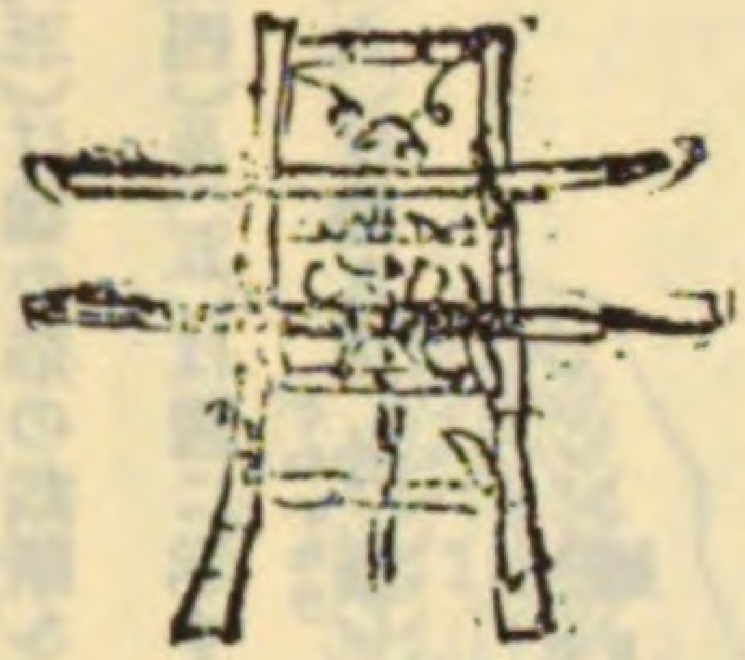
近來發明せし專賣特許新形實用石鹼入といふは理學的作用より考案せし由、則ち圖の如く蓋は蒲鉾形にして、之を開くには蓋は自ら底に潜り隱れて曾て膨張る患なきが此器の取柄なり、

二



（二）は此石鹸入の底を示したるものにして蓋を開けたる時は二重底となる仕掛なり、躰裁も他のものに比して優美なる所あり、其定價を聞くに鐵鍮製二十錢鍍丹鍍製二十二錢、ニッケル製十二錢錻丹製十二錢舶來色板製九錢五厘なりと

架



筆　架

圖に示したるが如きは近來流行の筆架なりといふ、竹製一架三錢より金屬製は嗜好に任すと聞く

花屋敷の趣向

團子坂以外に毎歳好評を博する淺草公園花やしきは例年の通り昨今菊細工準備中なり目下大入の川上演劇の日清事件を仕組む趣にて即ち北京城外關門の塲と渤海灣の一島に海軍士官忠烈決死の塲其外數ヶ所なるが人形細工人は安本龜八改め龜翁にて翁は爲めに毎日淺草座川上の部屋へ出張して幕毎に川上座長の面前にて鐵筆もて其似顏を彫刻中又渤海灣の塲は大洪具大仕掛にて慘憺たる月夜洋中の一島に三士官決死壯烈の狀を月光に照らし見する由又同園の花壇菊は本年の旱魃にも拘はらず例年よりは美事に生育して已に長五六尺に及びし由なれば例年より早かるべしとの話又菊細工の小屋掛は來十月一日より着手し又同園入口は菊を以て旭章を交叉せる額を掲げ同十廿日前後に開塲するよし其の外盆栽動物等相變らず賑なり

日用品物價（九月廿一日）

◎白米小賣相塲（一圓に付）●一等白米七升一合●二等白米七升四合●三等白米七升七合●四等白米八升三合●五等白米八升七合

◎雜穀　●南京白大豆一斗七升八合●同靑大豆一斗六升●同澁色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗四升●八戸大豆一斗八升●舶擘澁色小豆一斗二升二合●室蘭黑豆二斗一升●新目無白と一斗一升●本石上大豆一斗八升●南部大豆一斗八升五合●川越皖豆一斗六升五合●越後大豆上一斗七升中一斗八升下一斗九升●室蘭小豆一斗一升五合●中手小豆一斗四升五合●新川越本塲金時九升五合●新庄內平豆一斗三升五合●銚子隱元八升七合

◎鹽　●赤穗四俵●大鹽井に八案四俵一分●本齋六俵一分●新齋六俵五分五厘

◎肥し物　●內海羽粕三貫九百目●撫前粕四貫五百目●鯡粕極上四貫五百目●同上四貫六百目●同中四貫七百目●同並四貫八九百目●南部仙臺中羽粕四貫百目●厚岸粕上四貫五百目●同並七百目●本塲寒干鰯二杯二

合
◎糠 ●兵庫羽糠十三貫五百ヶ十五貫●北海羽糠十貫五百目●酒造羽糠十貫四百目●越中羽糠十貫目
◎西洋食料品 （四ダースに付）●鳥印ミルク十五圓四十錢●人形印ミルク十一圓二十錢●子ストミルク十圓四十錢●和製天人印ミルク八圓六十錢（一ダースに付）●食鹽二圓三十錢●カラシ粉二圓四十錢（一斤に付）●紫牛印バタ四十八錢●地球印バタ五十五錢●半斤に付二十九錢（一打に付）●ビスケット一斤入四圓●同次三圓五十錢（六ダースに付）●ジャム十一圓五十錢●胡椒粉十二圓五十錢●同黑八圓五十錢●ソース八圓八十錢（一打に付）●イスポアタ罐入四圓五十錢●同小罐入二圓六十錢

雜錄

征戰幻燈

其二 成歡の戰

おゝ勇ましき小さき兵士等よ。余は御身等に語るべき勇壯且つ勇壯なる物語を有せり。去る十六日に於ける朝鮮平壤といへる所の大陸戰と、十七日に於ける清國盛京省大孤山冲の大海戰と是なり。

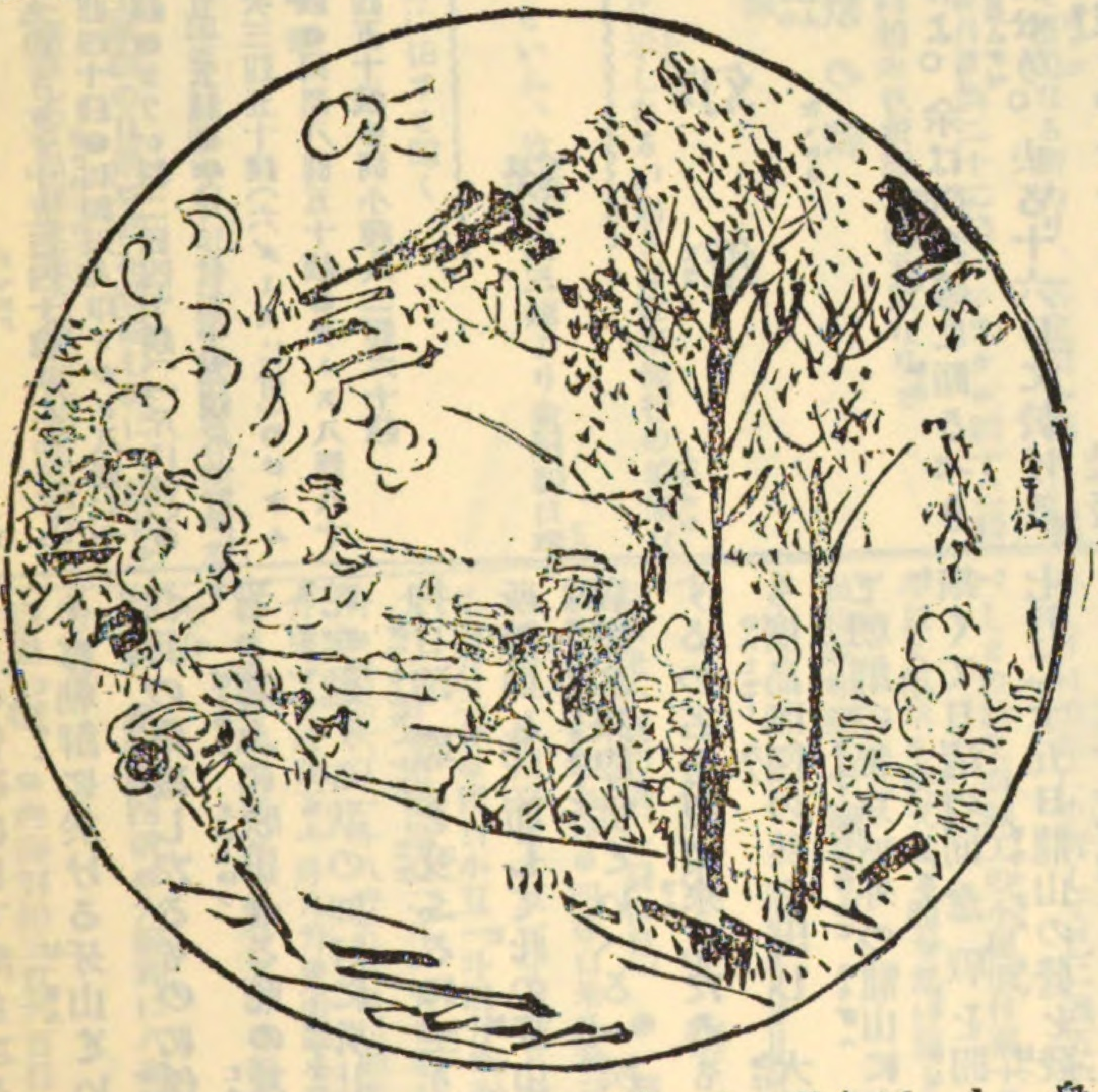
然れども余は此等の壯大豪快なる戰事を語る前に、猶一つの快事にして語らざるべからざるものを有せり。そは朝鮮に於ける牙山といへる所に屯營したる清兵を我兵の擊破したるものに係る。

看よ幕上に映出せる此の攻戰の圖を看よ。我が兵の叱咤突進する狀の如何に勇壯なるよ！

抑日清戰を交ふるに至りたる所以は、已に語りたる所の如し。而して此の牙山に屯したる清兵は是より先朝鮮に東學徒といへる一揆の內亂ありしに、之を鎭撫するの名を以て來りたるものにて、之が爲に我邦にても廣島師團の兵を出し、大島少將混成旅團の大將として朝鮮の都京城外の龍山に屯在したりき。

斯くて日清の間愈戰を開かるゝに及び、大島少將は七月二十五日龍山の營を發して果川に宿し、二十六日果川を發して水原に宿し、二十七日水原を發して振威に宿し、二十八日振威を發して素砂場に宿せり。敵は

間近き成歡驛にありたり。
二十九日夜零時左翼隊は先づ素砂塲の露營を發して迂回して敵の側背に向ひ、右翼隊は午前二時武田中佐之を率ひて進發し、安城の渡に至りしに、橋は已に撤せられてわらず。忽ちに敵の伏兵前岸の畑樹間に起りて一齊に我軍を聚射したり。夜暗くして敵兵不意に起りたることなれば、我軍も暫し猶豫ひて見へけるに、一壯漢の直ちに軍前に突立ちて洋劍を振り翳し、大聲令を傳へて進め！〳〵と叫ふものありたり。



是なん中隊長松崎大尉なり。彼は身を挺して衆を麾き自ら躍て流を亂て進めり。衆之に從ひ銃劍を眞向に擬して前岸に蹐登し、喇喊して縱橫無盡に五百餘の敵の伏兵を斫散しける。惜夫最る勇悍なる松崎大尉は、此時丸に中りて斃れぬ。此の十五分間は此役の最も激烈なる戰なりしなり。此の時我兵死するもの七八名、水に溺れたるもの十餘名。

斯くて此手の兵は突進して敵の第一陣たる松林を陷いれ、更らに第二陣を奪ふて、第三陣に打掛れり。偶天

始めて明けて、旭日東山に輝きぬ。
敵兵の勇あるものは、速りに我軍を狙撃したりき。
我が右翼は左翼が敵の第三陣に打排るを見るや、直ちに突進して之を夾撃し、中軍亦進んで三方より敵壘を砲撃し、其旗色の動くや、吶喊して短兵急撃以て、悉く敵の六營を奪て、一齊に凱歌を擧げたるは午前第七時なりける。
我兵はこれより進んで牙山に至りしも、敵は全く逃げ去てあらざりき。敵の大將葉志超は成歡の役に出遇はず、副將聶士成は傷を負ふて走りたりと云ふ。
此戰武田中佐が大敵前に在るに當りて悠然烟を喫し、一の喇叭卒が死に至るまで進軍の譜を吹て息まざりしは、松崎大尉の勇死と共に、一軍の美談として世に知られき。
國民新聞『斃死の喇叭卒』を記して斯く云へり。『朝鮮成歡の役、我軍清軍の襲ふ所となり、一隊直ちに流を渉つて進む。全軍續かず、先鋒頗る苦戰し、松崎大尉先づ鬪死し、兵士陣沒するもの相繼ぐ。中に一喇叭卒あり、頻りに進軍の調を奏す。其聲、初めは堂々乎として萬馬突出の勢あり。已にして急調となり、已にして斷續し、已にして其音呼吸の如く低く、已にして音なし。就て之れを見れば彼は其胸部に銃丸を受けたるなり。其急調は初めて銃丸を受けしがため也。其音の斷續せしは其痛に堪へざりし也。其音の呼吸の如く低かりしは、彼が銃丸のために吐き出したる血の最後の一滴まで、其の喇叭を吹奏したるがため也。其の音絕たるは、其血已に絕へたるがため也。何等凄絕、何等勇壯、而してまた何等絕大至强なる義務的道德的の最後ぞ。』



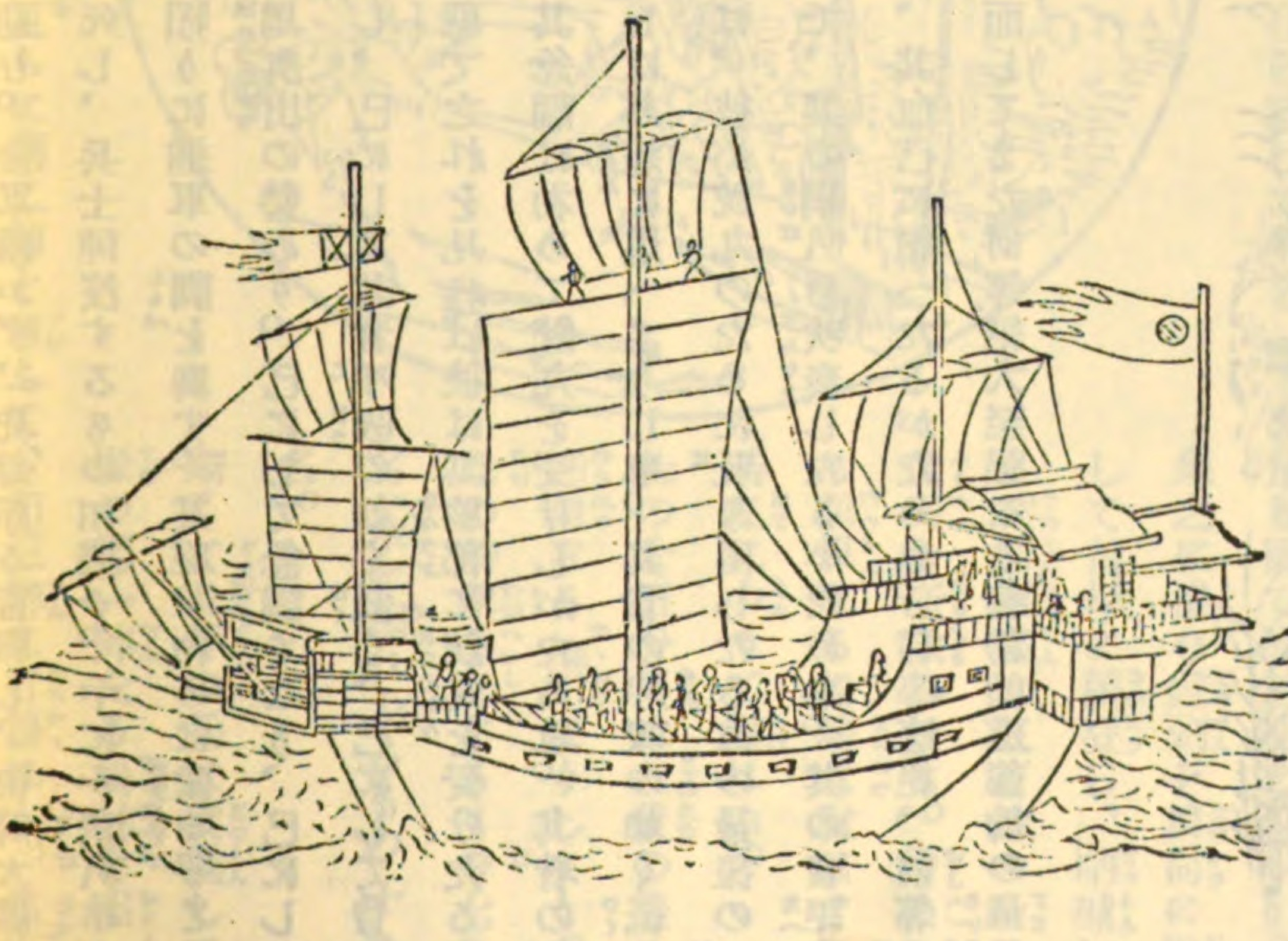
御朱印船

日本人が如何に勇悍なる國民なるか、如何に膨脹的國民なるかは、戰國の末に朝鮮支那印度の海岸を擊しつゝ、所謂八幡船に架して東大洋を横行したりしを見ても著けき事なり。

當日の我が外國貿易船たる御朱印船は、其の數實に百九十七艘ありて、其製造には日本前と稱するあり。唐船造りと稱するあり。又唐船造りには支那形と西洋形との兩種ありき。

中に就て西洋形は德川家康が墨其哥航海に用ゐしめ、伊達正宗が呂宋渡航に用ゐしめし類是なり。支那形は最も多く用ゐられたるものにて、花形船と呼ばれぬ。而して日本前船は此等の諸制を參酌して造りたるものなれば亦頗る完全なる商船なりき。

松浦法印、島津義弘、加藤清正、鍋島直茂、五島盛利、及び長崎の末次平藏、船本彌平次、荒木總右衛門、糸



屋傳右衛門、堺の伊豫屋頁千、京都の角倉與一、全大膳、茶屋四郎次郎、末吉孫左衛門の如きは、其中の大船所有者として知られたるものにて、此等の船は皆安南、暹羅、呂宋、東埔寨及び西洋にも航海したりき。此に圖するは末吉孫左衛門が其所有の御朱印船を圖して扁額とし、之を京都清水寺に奉納したりしもの、其長さ二十間ありと云へり。

又名高き山田長政が其軍艦を圖して、駿州府中の淺間神社に寄進したりしものも、其形大に相類似し、唯鐵砲の装置と檣上に遠望狙擊の爲めに人を立たしむべき設けあるとを異にしたり。

而して天竺徳兵衛の口上書に、彼が取り乗りたる角倉與一の所有船が、長さ二十間幅九間にして三百九十七人を乗せて渡航したることを記すを見れば、亦以て當日航海の盛と航海力の强大とを察するに餘あるべし。

堀秀政

（口繪の繪解き）

堀秀政は久太郎と稱し、豐臣氏の諸將中特に才幹あるを以て知られたるものなりき。越前を領し、北庄（今の福井）の城主として極めて徳望ありたり。

嘗て其弟多賀出雲守兄に快からざることありて其國を去りしに、彼其途上にて窮乏せんことを氣遣ひ、人をして追ふて黄金十枚を貽らしめぬ。

而して其包み紙をば彼自ら丁寧に其皺を延べ、近臣に命じて之を箱に收藏せしめり。言ふ、

凡そ財寶は用ふべき事には十枚の黄金も惜むに足らず。唯無用の事には斯の包紙をも濫りに費すべからず。



時事一斑

親征

大元帥陛下は清國御征討の爲め、十三日御發輦にて億兆歡呼の中に親征して西廣島に向はせられ、十六日御着輦、舊廣島城内本丸五臺階天主臺の行在所に入らせられ、大本營は同第五師團司令部に置かれたり。

九月十六七日

九月十六七日は、赤國民の宜しく記臆すべき日の一となれり。

大元帥陛下が廣島に御着輦ありたる此日は、朝鮮に於ける我陸軍が、大島少將混成旅團を率て正面より、大迫少將混成旅團を率て右より、野津中將自ら本軍を率て左より、三面合擊して、前日より此朝に至り、遂に平壤を陷れて、大に二萬の清兵を破りたる日なり。」

大元帥陛下が廣島に御着輦ありたる翌日は、盛京省大孤山沖に於ける我が海軍十二艦が清の定遠鎮遠以下合せて十四艦六水雷艇に逢て、其四艦を沈め三艦を焼けるの日なり。

沙場の花

赤十字社看護婦は、仁禮子爵婦人之を管して第二回の發遣をなせり。

沙場の花。修羅巷中の天使。征戰萬里に赴するものを活すは、實に彼女等が春雨の若き涙の露の霑ひによらずんばあらず。

又

在仁川の我が篤志婦人は、看護婦從軍の許可を得て、去月二十四日已に發程したりと。

仁川居留民の其志を壯として、之を埠頭に送るもの數十。

白布

我が海軍の將士は發するに臨みて、白きものは手巾を

も拘へざりしと云ふ。白布は以て降を表するの用に供するもの、之を拘へざるは決死を示すなり。日本國民の日本國民たる所以、實に此に在りと謂ふべし。

北京へ！

世界の眼は日本に集まれり。日本の眼は戰士に集まれり。而して戰士は皆西天を指して叫ぶ、北京へ！北京へ！

國民の敵愾心

軍事公債五千萬圓を募らるゝや、五六縣の未だ確定せざるものを除き、十八日までに之に應ずるもの、實に七千六百萬圓餘。以て忠烈なる國民を見るべし。以て國民の敵愾心を見るべし。

稻田穰々

稻田穰々、豐年の兆あり。大々的日本建設の門出、亦自ら惡しからざるなり。

教育費國庫補助の標準

實業教育費國庫補助の標準、一通牒として文部省より各府縣に示さる。曰く、當分の内農業商業教育を補助するよりは、工業教育を補助するを主要とす。曰く、高等學校を補するよりは、低度の學校を補助するを急務とすと。知るべし工業立國の精神と、國民下層に於ける學藝洽普の方針とを。

日本の面目を汚す者

一雜誌は海外に在る我邦が醜業婦を統計して下の如く數へり。

地名	醜業婦	貸座敷
浦鹽斯德	四二〇人	一四軒
天津	三五〇	一二
フーチウフ	四〇〇	一六

廣東	二五〇	一〇
澳門	一〇〇	六
四貢	三〇	四
磐石	二〇	三
カルカッタ	五〇	七
コロンボ	二	一
アデン	七	一
ニユーチヤン	三〇〇	一五
夏門	五〇〇	七
香港	二五〇	七
スヮトウ	四〇〇	三
ニシボ	三〇〇	三
新嘉坡	四五〇	一五
ピーナン	四五〇	一六
マドラス	三〇〇	四
孟買	三八	七
合計	三、四四七	一四一

此等は實に日本の面目を世界に汚すなり。矯風家の大に留意すべき所のもの歟。

篤志愛すべし

對馬の青山繁次郎氏あり、年七十八。曾て對州藩政に與かりし人なりしも、今は同島上縣郡三根村尋常小學校の教師たり。今夏夏期講習會の長崎に開かるゝや、氏は猶て途々之れに會し、燬くが如き炎暑中孜々怠らさりしと。其篤志愛すべき哉。



竹越與三郎著

參版 支那論

日清韓三國地圖入

定價十錢
郵稅二錢

參版には歐洲勢力東漸地圖及び日韓清三國實用明細地圖を添ゆ

この書は民友社に於て夙に史筆を以て錚々の譽ある竹越與三郎氏の著す所にして其の主眼は今後我國に於ける最も重要なる外交問題の一つ即ち支那に對する我國の覺悟を論じたるものなり今其大要を列叙すれば卷頭先づ「大なる日本」と題して我が「大日本」は已に東亞の隱居國に非ず世界の强國と袂を聯ねて周旋すべき國民たるを意識して「更に大なる日本」を建設せざる可らず而して今や其時代に際會せりとて之を列國の形勢と地理上より論じ次に此「大なる日本」を建設するに就ては先づ我國外交の深憂大患たる且我國家擴張の前途を遮る者は歐米に非ずして清國なる由を説き彼を歷史に徵して侵略的山賊的性質を證し彼が其大を自覺するの日は隣邦に取て最も危險なり、今や其危險の頂上に達して彼が「人種的侵略運動の大勢は「大なる日本」に襲來しつゝあり我國は到底山賊的侵略的の清國と相結托して東洋の和平を謀る可らずと論じて「日清同盟の迂謬」を笑ひ「退讓政策」の徒らに彼か權力を增長するに過ぎざるを論破して正義人道文明の爲に上帝と萬國の視聽の前に於て飽くまでも兵火に訴へて清國を懲伐するは止むを得ざる事にして又我日本の一大天職なりと此處に一段を論結せり著者はこれより戰後の問題に筆を進めて戰爭より生ずる損害の要償及び賠金として清國より金貨五億萬弗を取り貨幣制度を改革して經濟上の勝者となり條約を改締し國權を伸張し進んで世界の大舞臺に出で歐洲强國と袖を聯ねて周旋し世界に於ける「大なる日本」の大業を成就し我國力を以て第二のウェストファリヤ會議を東洋に開き以て十九世紀に於ける第二の權力平均を作らざる可からずと結論せり議論公平着眼允當批評及精彩政治家の活識ありて始めて這般の大問題を論じ得べし加ふるに行文の流麗なる一玉の銀盤を走るが如く讀者をして不覺卷を掩はしむ（讀賣）

征清の軍一たび其旗幟を飜へしてより文士の筆を揮うて國民敵愾の氣を奮起せしむるに力めたるもの一二計數すべからず而して其爲す所多くは戰記の類に止まり其機を察し策を運し口角沫を飛ばせ舌頭火を生ずるの概あるを見る少し今竹越與三郎氏の著に係る支那論を閱するに日清同盟論の迂謬を嗤ひ兵火に非んば清國の惰眠を醒す能はざるを説き最後に日露佛の同盟を以て我が清國に對する大希望を貫かんとしたるが如き策士胸中の蘊蓄する所夷の思ふ所に匪ずと謂ふべし（大阪朝日）

●我國の清國に於ける一は文明他は蠻野、進取と退步、到底其東洋に並立す可からざる所以を説き皆な過看の事實と將來の推理に據りて言を立つ倘ほ其の北京征伐の氣力なくんば朝鮮を經營すべからず我軍の一たび海に浮ぶの日は世界の舞臺に上るの覺悟なかる可からざる也」との數語に至りては恐らくば此著にる於ける神髓ならん（報知）

發兌元 東京市京區橋日吉町四番地 民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行